# 八千代市上高野白幡遺跡(2)・(3)

― 一般国道296号道路改良事業埋蔵文化財発掘調査報告書 2 ―

令和6年2月

千葉県教育委員会

# 八千代市上高野白幡遺跡(2)・(3)

－ 一般国道296号道路改良事業埋蔵文化財発掘調査報告書 2 －

# 序　文

いにしえより温暖な気候に恵まれた千葉県には、先人たちの生活の痕跡などが埋蔵文化財包蔵地（遺跡）として数多く残されています。これらの埋蔵文化財は県民共有の財産として、地域の歴史や文化の解明に欠かすことのできない貴重なものです。

千葉県教育委員会では、埋蔵文化財の保護と各種開発事業との調整、埋蔵文化財の調査研究・文化財保護思想の普及などを目的とした諸活動に加え、千葉県が行う開発事業に係る埋蔵文化財の記録保存のための発掘調査や調査成果の整理、報告書の刊行について実施しております。

本書は、千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告第47集として、一般国道296号道路改良事業に伴って実施した八千代市上高野白幡遺跡の発掘調査報告書です。今回の調査では、弥生時代中期の集落を囲む環濠の一部が発見され、印旛沼周辺地域では類例の少ない集落の形態を示す貴重な資料を得ることができました。

刊行に当たり、本書が学術資料としてだけでなく、郷土の歴史に対する興味を深めるための資料として多くの方々に広く活用されることを期待しております。

最後に、発掘調査から整理作業を通じ、地元の方々をはじめとする関係者の皆様や関係諸機関には多大な御協力をいただきました。心から感謝申し上げます。

令和６年２月

千葉県教育庁教育振興部
文化財課長　　稲村　弥

# 凡　例

1　本書は、千葉県県土整備部千葉土木事務所による一般国道296号道路改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　本書は、下記の遺跡を収録したものである。なお、本遺跡の調査は、平成22年度に財団法人千葉県教育振興財団(当時)が行った調査に続く第２次及び第３次調査にあたることから、それぞれ(２)及び(３)と表記する。

上高野白幡遺跡(２)・(３)　八千代市上高野676-6ほか(遺跡コード221-038(２)・(３))

3　発掘調査は、千葉県県土整備部道路整備課の依頼を受け、千葉県教育庁教育振興部文化財課が令和２年度及び３年度に実施し、報告書作成に至る整理作業は令和２～５年度に実施した。

4　調査組織及び発掘調査と整理作業の期間・担当者等は、第１章第１節に記載した。

5　本書の執筆は文化財主事　久我谷渓太が行い、編集は主任上席文化財主事　蜂屋孝之が行った。

6　発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県県土整備部道路整備課、千葉県県土整備部千葉土木事務所、公益財団法人千葉県教育振興財団、八千代市教育委員会ほか多くの方々から御指導、御協力を得た。

7　本書で使用した地図の座標値は、日本測地系に基づく平面直角座標で、図面の方位はすべて座標北である。

8　本書で使用した地形図は下記の通りである。

第１・７・26図　八千代市発行　1/2,500八千代市都市図(平成12年測図、平成29年修正)を編集

第３・24図　国土地理院提供の基盤地図情報「数値標高モデル」から取得したDEMデータと地理院地図(電子国土WEB)から作成して編集

第４図　国土地理院発行　1/2,5000地形図を編集

第27図　Google Earthから取得して編集

第29図　国土地理院提供　デジタル標高地形図「千葉県」を編集

9　図版１の航空写真は、国土地理院による1989年撮影のものを使用した。

10　遺構の種別は、以下の記号を使用した。

ＳＩ：竪穴住居跡　　ＳＫ：炉跡　　ＳＤ：環濠・溝

11　本書に掲載した調査区等の縮尺や焼土などの用例については挿図中に示した。
また、遺構図・土層断面図上の攪乱は、Ｋの略称で示している。

12　遺物実測図の縮尺は、以下の通りである。

土器実測図　１／３・１／４　　拓本図　１／３　　石器　１／３・２／３　　土製品　１／１

# 本文目次

第１章　はじめに …… 1
　第１節　調査に至る経緯と経過 …… 1
　第２節　調査の方法 …… 3
　第３節　遺跡の位置と環境 …… 5
　　1　地理的環境 …… 5
　　2　歴史的環境 …… 6
　　3　基本土層 …… 9
第２章　調査の成果 ……10
　第１節　成果の概要 ……10
　第２節　旧石器時代の遺物 ……10
　第３節　縄文時代の遺構と遺物 ……12
　　1　土坑 ……12
　　2　包含層出土の遺物 ……14
　第４節　弥生時代の遺構と遺物 ……21
　　1　竪穴住居跡 ……21
　　2　環濠 ……24
　　3　遺構外出土弥生土器 ……30
　第５節　その他の遺構と遺物 ……31
　　1　溝状遺構 ……31
　　2　遺物 ……31
第３章　総括 ……33
　第１節　縄文海進最大期頃の地形環境と遺跡立地 ……33
　第２節　環濠の性格 ……34
　第３節　千葉県域における北島式系土器の新事例 ……37
報告書抄録

# 挿図目次


第１図　遺跡の地形と調査区　位置図…… 2
第２図　下層確認グリッド・上層確認トレンチ配置図…… 4
第３図　遺跡周辺の地形…… 6
第４図　周辺の遺跡分布図…… 7
第５図　基本土層図…… 9
第６図　旧石器時代の遺物……10
第７図　遺構配置図……11
第８図　ＳＫ００１……12
第９図　ＳＫ００２・ＳＫ００３……13
第10図　包含層出土遺物（１）……15
第11図　包含層出土遺物（２）……16
第12図　包含層出土遺物（３）……17
第13図　包含層出土遺物（４）……18
第14図　包含層出土遺物（５）……19
第15図　包含層出土遺物（６）……20
第16図　ＳＩ００１（１）……22
第17図　ＳＩ００１（２）……23
第18図　ＳＤ００１（１）……25
第19図　ＳＤ００１（２）……26
第20図　ＳＤ００１（３）……27
第21図　遺構外出土弥生土器……31
第22図　その他の遺物……31
第23図　ＳＤ００２……32
第24図　縄文海進最大期頃の地形想定図……33
第25図　地質断面図……33
第26図　環濠の想定位置……35
第27図　印旛沼周辺地域における宮ノ台式期の集落遺跡の分布……36
第28図　上高野白幡遺跡出土の北島式系土器……38
第29図　千葉県域の北島式系土器出土遺跡……39


# 表目次


第１表　周辺遺跡一覧表…… 8
第２表　遺構一覧表……10


# 図版目次


図版１　上高野白幡遺跡周辺航空写真
図版２　遺構ＳＤ００１・ＳＩ００１
図版３　遺構ＳＤ００１・ＳＩ００１・ＳＫ００１・ＳＫ００２・ＳＫ００３・ＳＤ００２・縄文時代遺物出土状況
図版４　ＳＩ００１・ＳＤ００１出土遺物
図版５　ＳＤ００１・ＳＫ００２出土遺物・旧石器時代石器・包含層出土遺物・その他の遺物
図版６　包含層出土遺物（１）
図版７　包含層出土遺物（２）
図版８　包含層出土遺物（３）・ＳＩ００１出土遺物・遺構外出土弥生土器

# 第１章　はじめに

## 第１節　調査に至る経緯と経過

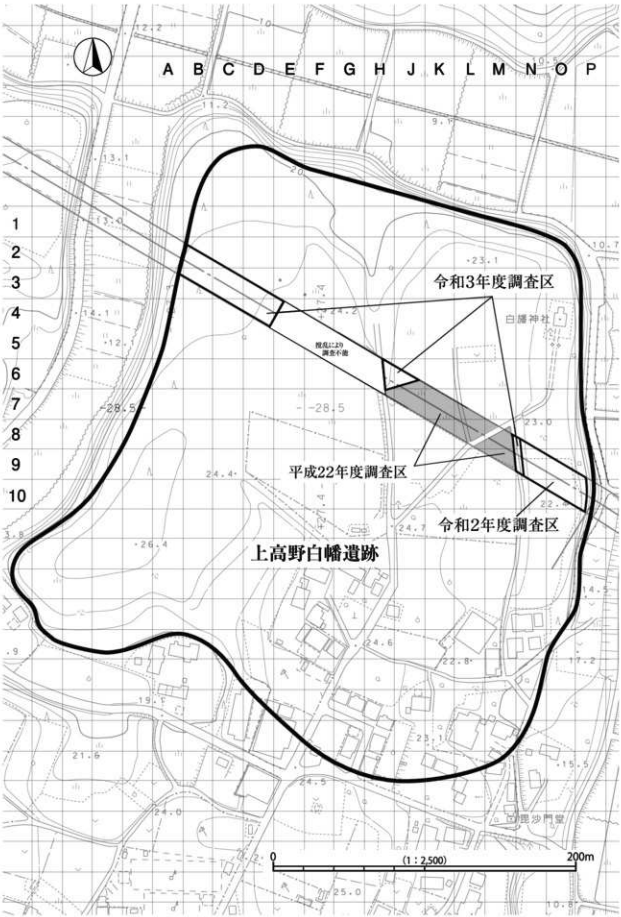
千葉県匝瑳市八日市場を起点に、印旛地域を経由し、船橋市宮本町までの総延長66.2km結ぶ国道296号は、県の東西を結ぶ幹線道路として重要な機能を果たしている。しかしながら、特に八千代市域及び佐倉市域を通過する区間では、慢性的な交通渋滞が問題となっている。これは当地域一帯で大規模な宅地開発が進んだ結果、交通量が著しく増大したことに原因が求められる。

県は渋滞の解消を図るため、佐倉市上座で国道296号と分岐し、八千代市米本で国道16号に接続するバイパス道を敷設する整備計画を立案した。これにあたって平成７年６月及び平成12年12月に千葉県千葉土木事務所長より事業地内における「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」の照会文書が、千葉県教育委員会へ提出された。千葉県教育委員会では現地踏査等の結果を踏まえ、事業計画地内に５ヶ所の埋蔵文化財包蔵地が所在する旨の回答を行い、その取扱いについて関係諸機関で協議を重ねた結果、事業の性格上やむを得ず記録保存の措置を講ずることとなった。

当事業に係る最初の発掘調査は、平成９年度に赤作遺跡・阿蘇中学校東側遺跡を対象に行われ、翌年に報告書が刊行されている（財団法人千葉県文化財センター 1998）。平成11年度以降も堂の上遺跡ほか５遺跡について発掘調査を実施し、平成27年度に報告書を刊行している（千葉県教育委員会 2016）。上高野白幡遺跡の第１次発掘調査も平成22年度に行われ、同書にその成果が収録されている。なお、発掘調査及び整理作業は、平成24年度までは財団法人千葉県文化財センター（現・公益財団法人千葉県教育振興財団）が行い、平成25年度以降は千葉県教育委員会が引き継いで実施している。

本書に収録した発掘調査は、令和２年度に実施した上高野白幡遺跡の第２次発掘調査および令和３年度に実施した第３次発掘調査で、調査組織及び担当者・期間・内容は以下のとおりである。

○令和２年度　千葉県教育庁教育振興部文化財課
　文化財課長　田中文昭　　副課長　高梨俊夫　　発掘調査班長　大内千年
　発掘　実施期間　令和２年10月１日～11月13日
　　担当者　文化財主事　菅澤由希
　　内　容　調査対象面積　1,093㎡　確認調査　上層 1,093㎡　下層 20㎡
　　本調査　上層 230㎡　下層 0㎡
　整理　実施期間　令和２年11月13日～12月31日
　　担当者　文化財主事　菅澤由希
　　内　容　水洗・注記～図版作成の一部
○令和３年度　千葉県教育庁教育振興部文化財課
　文化財課長　田中文昭　　副課長　高梨俊夫　　発掘調査班長　吉野健一
　発掘　実施期間　令和３年12月１日～令和４年２月24日
　　担当者　文化財主事　横田真名望




第１図　遺跡の地形と調査区　位置図

内　容　調査対象面積　1,759㎡　確認調査　上層419㎡　下層48㎡
本調査　上層802㎡　下層０㎡

整理　実施期間　令和４年３月１日～３月31日
担当者　文化財主事　横田真名望
内　容　図版作成の一部

○令和４年度　千葉県教育庁教育振興部文化財課
文化財課長　金井一喜　副課長　四柳　隆　発掘調査班長　黒沢　崇

整理　実施期間　令和５年２月１日～３月31日
担当者　文化財主事　久我谷渓太
内　容　水洗注記～原稿執筆の一部

○令和５年度　千葉県教育庁教育振興部文化財課
文化財課長　稲村　弥　副課長　四柳　隆　発掘調査班長　黒沢　崇

整理　実施期間　令和５年10月２日～10月31日
担当者　主任上席文化財主事　蜂屋孝之
内　容　原稿執筆の一部～報告書刊行

## 第２節　調査の方法

発掘調査にあたっては、公共座標（日本測地系）に基づいてグリッド設定を行った（第１図）。平成22年度の第１次発掘調査時と同様にX＝-28.720、Y＝27.580を起点とし、20m×20mの方眼網を設定して大グリッドとした。名称は北から南へ１、２、３…、西から東へＡ、Ｂ、Ｃ…とし、両者を組み合わせて１Ａ、１Ｂ、１Ｃ…のように呼称した（なお、数字「１」との誤認を避けるため、アルファベッド「Ｉ」は使用していない）。大グリッドはさらに２m×２mの小グリッドに100分割し、北西隅を00として、東へは１の位を足して01、02、03…、南へは10の位を足して10、20、30…とし、南東隅の99まで番号を付した（第７図）。大小のグリッドを組み合わせて「1B-12」のように呼称し、遺構・遺物の位置はこの方眼網に基づいて記録した。今回報告する調査範囲はX＝-28.760、Y＝27.620の２Ａ大グリッドから11Ｐ大グリッドまでに位置している。

令和２年度の調査対象面積は1,093㎡で、上層はトレンチを設定せず表土全面を除去して確認調査を行った。表土は厚さ約15㎝で、その下にハードロームのブロックが多く混ざる転圧された暗褐色土層が40㎝～70㎝堆積していた。調査範囲の中央と南西部分に深さ２m以上に達する大規模な撹乱があり、ここから掘り起こされた土とみられる。遺構確認面はこの撹乱土の直下で検出された立川ロームⅢ層である。ただし調査区北西部の一部は竹の根による影響を大きく受けており、Ⅲ層下部を遺構確認面とした。調査の結果、調査区の北西部で縄文時代の炉穴と弥生時代の溝が確認されたため、その周辺を本調査範囲（230㎡）とした。旧石器時代の下層調査については、撹乱箇所を除く範囲に２m×２mのグリッドを設定して確認調査を実施したが、遺物は検出されなかった。

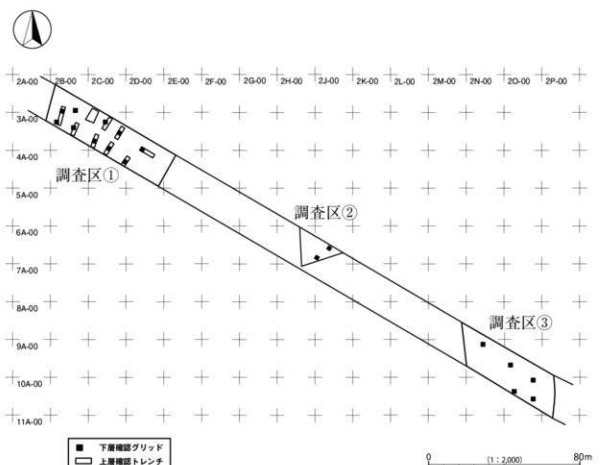
令和３年度の調査対象地は３地点に分かれており、面積は合計1,759㎡である。上層は、西側の調査区ではトレンチ調査、中央の調査区・東側の調査区では、表土全面を除去して確認調査を行った。遺構確認面は、立川ロームⅢ層上面である。調査の結果、縄文時代の土坑、弥生時代の竪穴住居跡や溝が確認されたため、その周囲802㎡を本調査範囲とした。旧石器時代の下層調査については、令和２年度調査と同様に２m×

２ｍのグリッドを設定して確認調査を実施したが、遺物は検出されなかった。

第２図に第２次及び第３次の調査区の位置及び確認調査におけるトレンチ配置等を示した。前述したように第３次発掘調査は３ヶ所の調査区に分かれているため、第２次発掘調査分と合わせると調査区の数は計４ヶ所となる。ただし、第２次調査の調査区と第３次調査の東側調査区は隣接しており、両調査区にまたがる遺構も存在することから、各調査区については、第３次調査の西側調査区を「調査区①」、同中央調査区を「調査区②」、第２次調査の調査区と第３次調査東側調査区を合わせて「調査区③」として報告する。

記録作成に際しては、全体図と遺構平面図の実測図面を平板測量で実施した。写真撮影は、デジタルカメラ（RAW＋JPEG型式）によって行った。個々の遺構は、種類ごとに定めた記号（竪穴住居跡：SI、溝：SD、土坑：SK）と３桁の通し番号とを合わせて、「SI001」のように表記した。ただし通し番号は、第１次発掘調査からの連番とはしていない。遺物は遺構ごとに、遺構外から出土したものは小グリッド単位で通し番号を付して取り上げた。

整理作業は、出土遺物の水洗・注記作業を行った後、種別・器種分類をし、実測・拓本作業を行った。発掘調査で作成した調査図面・写真等の記録整理の後、挿図・写真図版を作成し、トレースや写真補正等を行った。その後、原稿執筆・編集・校正作業を経て、報告書刊行に至った。また、報告書編集中に報告書に基づいた収納整理作業も併せて実施した。




第２図　下層確認グリッド・上層確認トレンチ配置図

## 第３節　遺跡の位置と環境

### １　地理的環境（第３図）

上高野白幡遺跡が所在する八千代市は、住宅団地発祥の地としても知られる県内有数の住宅都市であり、令和５年度現在の人口は約20万人を数える。県北西部に位置し、市域は東西約６㎞・南北約10㎞、面積約51k㎡の範囲におよび、低地部を除く広範囲が下総台地上に立地している。当遺跡もまた標高25m前後の台地上に展開しており、その地形的な特性や周辺の自然環境を活かした人々の営みを伝えている。

台地を台地たらしめている平坦部と低地との高低差が織りなす景観は、海成層・火山灰層の堆積と河川による浸食により形づくられたものである。市域の台地崖面の下部には、下総層群の上部に堆積する上岩橋層の露頭が認められる箇所があり、低地部でのボーリング調査でも沖積層の下に同層が確認されている。下総層群は更新世中期の堆積層であり、上岩橋層とその上位にある木下層は古東京湾の海底堆積物からなる海成層である。古東京湾は氷河性海水準変動に伴って海進・海退を繰り返した。上岩橋層と木下層との間の層理面が不整合であることは、上岩橋層の陸化後に再度の海進によって木下層が堆積したことを反映している。木下層も終末期には湿地化が進行し、そこへ箱根火山灰を起源とする常総粘土層が堆積した。

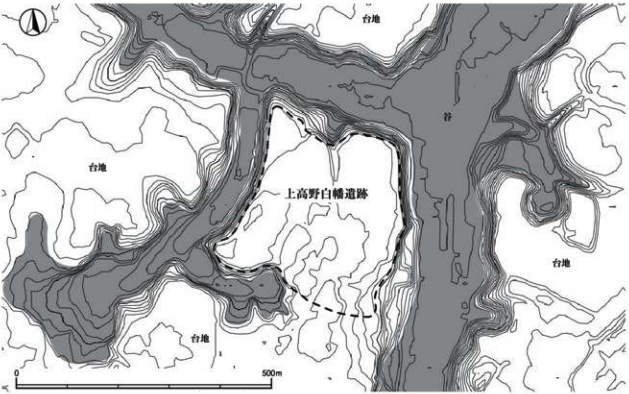
下総層群の陸化は、約５万年前に降下した東京軽石層の堆積までには完了し、以後は古富士山の火山灰を主な起源とする武蔵野ローム層・立川ローム層が海水に浸されることなく堆積していった。海退は海水面＝侵食基準面の相対的な低下を導き、河川による侵食が進んでローム層以下を刻む谷が形成されていった。先に触れた低地部でのボーリング調査の結果を踏まえれば、八千代市内では少なくともこの際に上岩橋層の上部までは侵食を受けたと考えられる。

第３図は上高野白幡遺跡が位置する台地とその周辺を範囲とした陰影起伏図に、0.5m間隔の等高線を重ねたものである。等高線が密に走る箇所が台地崖面であり、遺跡は西・北・東の三方を高低差10mほどの谷によって囲まれた舌状台地上にあることがわかる。これらの谷こそが更新世に形成が始まった侵食谷である。谷を刻んだ水は古鬼怒川に合流し、銚子付近で太平洋（鹿島灘）へと注ぎ出された。南側の「舌」の付根付近もおよそ西半分まで谷が刻まれているほか、大部分が埋め立てられてはいるが北側にも崖面を切り込む谷があり、地形に複雑さを与えている。

最終氷期の最大期には現海水準の100m以下にも達したとされる海退は、気候の温暖化によって海進へと転じた。極域などに分布する氷床や氷河は徐々に溶かされていき、同時に海水量は増加を続けた。海岸線は徐々に陸地の奥へと入り込んでいき、ついには現在の海水準・海岸線を超えて進んでいった。日本列島ではこの現象を一般に「縄文海進」と呼び、東京湾沿岸では縄文時代早期末（約7,000年前頃）に最大期に達したとみられている。

海進によって古鬼怒川が形成した谷を逆流するように入り込んだ海水は、周辺の低地部も徐々に浸しながら「古鬼怒湾（香取海）」と呼ばれる広大な内海を形成した。この内海の海底に堆積した層の上面は、八千代市域では新川の流域で標高１ｍ～３ｍ付近に分布している。当遺跡の東側の谷を流れる高野川の流域でも、同様の高度に海成層とみられる貝殻混じりの砂層がボーリング調査によって認められている。当遺跡の眼下にも古鬼怒湾が達していた可能性がある。当遺跡では早期の遺物を中心に縄文時代の人々の活動の痕跡が残されており、水産資源の獲得や水上交通を反映した遺跡形成が想定される。

縄文海進が最大期を迎えて海岸線の変動が緩まると、河川が内陸から運んできた土砂は沿岸部に安定的に堆積するようになり、低地の形成が進んだ。これにより陸地は拡大を始め、海岸線は後退していった。




第３図　遺跡周辺の地形

また、海水量の増加は海底下のマントル物質を押し流して陸地を隆起させていき、海水準は相対的な低下へと転じて、低地の形成がより盛んとなった。古鬼怒湾もまた、海退と連動して次第に土砂によって埋積が進んでいった。当遺跡の近隣では、後期になるとヤマトシジミを主体とする貝塚が出現することから、このころには一帯の水域が汽水域に変化していったと推測される。いわゆる「弥生の小海退」による水域の変動も、当遺跡直下の印旛沼から入り込む支谷に影響を与え、稲作に適した低地の環境が整った可能性があり、弥生時代中期後半になって当遺跡に集落が形成された背景には、稲作可耕地となる環境が周囲に出現したことに起因しているのではないかと推測される。

## ２　歴史的環境（第４図・第１表）

**旧石器時代**　当地域の旧石器時代遺跡の分布は、新川や手繰川の支流に面した台地の縁辺部に認められるという特徴がある。新川流域の権現後遺跡⑱・ヲサル山遺跡⑲・北海道遺跡㉑・坊山遺跡㉒・井戸向遺跡㉓・白幡前遺跡㉔の６遺跡で構成される萱田遺跡群は、その典型的な立地を見せる。立川ロームの各層に生活面が認められ、約２万年間の長期にわたる人々の活動の痕跡がほとんど途切れなく残されている。約100haに及ぶ遺跡群の範囲内に241ヶ所の遺物集中地点が確認されており、出土遺物は計17,215点に達する。南志津地区遺跡群を構成する上志津御塚山遺跡㉝・井野町大林遺跡㉞・上志津大堀遺跡・上志津芋窪遺跡でも、連綿と石器群が確認されている。

**縄文時代**　井野町大林遺跡では、尖頭器や削器などの草創期石器群の出現を経て、早期前葉に土器の使用が始まる。早期後葉には、権現後遺跡・間見穴遺跡⑯・先崎西原遺跡⑥・上座貝塚などで集落が現れるようになる。上座貝塚は茅山下層式期を盛期とする貝塚で、竪穴住居跡と炉跡群を伴っている。間見穴遺跡では前期にも引き続いて集落が営まれたほか、栗谷遺跡⑧でも同時期の竪穴住居跡が確認されている。中期の集落遺跡としてはヲサル山遺跡・ヲサル山南遺跡があり、このほか新川を挟んで対面する殿内遺跡㉘・浅間内遺跡㉙でも集落の形成が認められる。

第４図　周辺の遺跡分布図

第１表　周辺遺跡一覧表

| 遺跡番号 | 遺跡名 | 時期 | 遺跡番号 | 遺跡名 | 時期 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 上高野白樺遺跡 | 旧石器・縄文・弥生・近世 | 19 | ヲサル山遺跡 | 旧石器・縄文 |
| 2 | 平沢遺跡 | 旧石器・縄文 | 20 | 南海道遺跡 | 弥生・奈良・平安 |
| 3 | 阿蘇中学校東側遺跡 | 旧石器・縄文・弥生 | 21 | 北海道遺跡 | 旧石器・縄文 |
| 4 | 赤作遺跡 | 旧石器・縄文・弥生・中世・近世 | 22 | 坊山遺跡 | 旧石器 |
| 5 | 先崎城跡 | 中世 | 23 | 井戸向遺跡 | 旧石器・縄文・弥生 |
| 6 | 先崎西原遺跡 | 縄文・弥生・古墳 | 24 | 白樺前遺跡 | 旧石器・縄文・弥生 |
| 7 | 上谷遺跡 | 弥生・奈良・平安 | 25 | 川崎山遺跡 | 旧石器・縄文 |
| 8 | 栗谷遺跡 | 縄文・弥生・古墳 | 26 | 上ノ山遺跡 | 弥生・古墳・奈良・平安 |
| 9 | 大山遺跡 | 旧石器・縄文・弥生・古墳 | 27 | 小板橋遺跡 | 古墳 |
| 10 | 神野貝塚 | 縄文 | 28 | 殿内遺跡 | 縄文・奈良・平安 |
| 11 | 神野遺跡（古墳群） | 縄文・弥生・古墳 | 29 | 浅間内遺跡 | 縄文・奈良・平安 |
| 12 | 道地遺跡（平戸台古墳群） | 縄文・弥生 | 30 | 村上迄ノ内遺跡 | 旧石器・弥生・奈良・平安 |
| 13 | 佐山貝塚 | 縄文・弥生・古墳 | 31 | 沖塚遺跡 | 旧石器・縄文・古墳・奈良 |
| 14 | 田原窪遺跡 | 弥生・古墳 | 32 | 新林遺跡 | 縄文・奈良・平安 |
| 15 | 佐山台遺跡 | 縄文・弥生・古墳・奈良 | 33 | 上志津御塚山遺跡 | 旧石器・縄文・近世 |
| 16 | 間見穴遺跡 | 旧石器・縄文 | 34 | 井野町大林遺跡 | 旧石器・縄文 |
| 17 | 村上宮内遺跡 | 縄文・奈良・平安 | 35 | 上谷津台南遺跡 | 縄文・弥生・古墳 |
| 18 | 権現後遺跡（痴綱砦跡） | 旧石器・縄文・弥生・奈良・平安・中世 | 36 | 井野長割遺跡 | 縄文 |

後期になると集落遺跡の数が減少する一方で､印旛沼南岸の台地上に貝塚を伴う大規模集落が出現する。佐山貝塚は、東西140m・南北200mの大型の馬蹄形貝塚で、後期から晩期にかけての貝塚である。貝塚は主に汽水性のヤマトシジミから成り、これに淡水性・鹹水性の種が加わる。点列環状貝塚に分類される神野貝塚(10)では、径140mほどの範囲に15ヶ所の小規模な貝の分布が認められる。南北約160m・東西約120mに及ぶ環状盛土遺構が確認された井野長割遺跡(36)も、これらの貝塚と同時期に形成が進んだ。また印旛沼の干拓工事の際には、晩期に属するとみられる丸木舟が発見されている。

**弥生時代**　前期の空白期と、中期前半の土器１点のみが認められた沖塚遺跡(31)などの時期を経た後、中期後半に至ると集落の形成が始まる。東西約120m・南北約100mに及ぶ環濠を伴う田原窪遺跡(14)では、46軒の竪穴住跡居跡が確認された。太型蛤歯石斧や柱状片刃石斧が出土し、竪穴住居跡内の炉跡からは多量の炭化米が検出されている。栗谷遺跡（８）では方形周溝墓群が確認されている。

後期になると遺跡数は増加する。集落の規模は一般に縮小傾向にあるが、栗谷遺跡では92軒の竪穴住居跡を数え、その中央からは大型の方形周溝墓も発見された。内房地域に由来する土器群の出土が目立つ萱田遺跡群では、権現後遺跡・ヲサル山遺跡において古墳時代に継続する集落跡や方形周溝墓群が検出されている。

**古墳時代**　間見穴遺跡では、前期の集落とともに全長27mの方墳が確認された。沖塚遺跡の竪穴住居跡内に構築された製鉄炉は、国内最古級の製錬用の炉として注目される。大量の土玉（漁網錘）が出土し活発な漁労活動が窺える佐山台遺跡(15)や、ベッド状遺構を伴う竪穴住居跡から鉄斧・銅鏃などのほか多量の遺物が出土した上座矢橋遺跡は、この時期に属する拠点的な集落跡である。

中期になると神野古墳群(11)が出現し、直径約50mの大型円墳である神野柴山４号墳では、粘土郭から石枕をはじめとする副葬品が出土した。帆立貝式古墳の桑納２号墳は、八千代市域の古墳で埴輪の樹立が明らかな数少ない事例である。

７世紀初頭前後には、全長約50mの前方後円墳である根上神社古墳が造営される。同時期の平戸台２号墳(12)では、箱式石棺内に計15体分の人骨が追葬されていた。近接する道地遺跡で確認された集落跡とともに、一帯を治めた勢力の存在が窺える。上座矢橋遺跡では、鉱石系の鉄素材を利用した鍛錬鍛冶を担っ

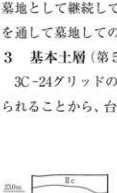
た専用工房とみられる竪穴住居跡が検出されている。

**奈良・平安時代**　村上込ノ内遺跡(30)は、8世紀前半に成立した集落遺跡で、天平15(743)年の墾田永年私財法の発布に伴う土地開発に関係して出現した可能性が指摘されている。上谷遺跡・栗谷遺跡からは約800点の墨書土器が出土し、そのなかに「丈」姓の人名を記したものが認められることや帯金具の出土から、位階を持つ人物の存在を窺うことができる。白幡前遺跡でも同様の遺物が認められているほか、四面廂建物跡と仏教関連遺物の出土から仏堂の建立が想定されている。仏教関連遺物は向境遺跡でも目立った出土例がある。先崎西原遺跡では、黒色処理した内面に陰刻花文のような絵画状の文様が施された土師器椀が出土しており、緑釉陶器を意識して製作されたものとみられている。

**中・近世**　村上氏の居城であった米本城跡や、これを太田道灌が攻めた際に陣を張った飯綱砦跡のほか、先崎城跡(5)・志津城跡などいくつかの城郭遺跡が認められる。浅間内遺跡で認められた集落跡は、正覚院館跡との関係性が指摘されている。萱田遺跡群を構成する井戸向遺跡では、平安時代から12世紀代まで墓地として継続して利用され、20基以上からなる土坑墓群が確認されている。赤作遺跡(4)では中・近世を通して墓地としての土地利用が続いていた。

## 3　基本土層(第5図)

3C-24グリッドの土層堆積状況を第5図に示した。今回の調査では縄文時代早期の遺物集中地点が認められることから、台地の西側には、Ⅱc層の遺存が比較的良好な区域があると考えられる。




Ⅱc層：10YR3/2（黒褐色）。しまり・粘性弱い。
**3Bグリッドを中心に縄文時代早期の遺物を包含する。上部はやや明るい色調となる。**
**Ⅲ層**　：**10YR4/6（褐色）**。しまり・粘性弱い。赤・黒色スコリア（φ1mm）を微量含む。
**Ⅳ層**　：**10YR4/3（にぶい黄褐色）**。しまりやや強い、粘性弱い。黒色粒子（φ～1mm）を多量、橙色スコリア（φ～1mm）を中量含む。
**Ⅴ層**　：**7.5YR4/4（褐色）**。しまりやや強い、粘性弱い。
**赤色スコリア**（φ1～2mm）、黒・白色スコリア（φ～1mm）を微量含む。下層からのATの拡散が認められる。
**Ⅵ層**　：**10YR5/4（にぶい黄褐色）**。しまり強い、粘性弱い。
**赤色・黒色スコリア**（φ2mm）、白・橙色スコリア（φ1mm）を多量含む。ATの凝集が認められる。
**Ⅶ層**　：**10YR4/4（褐色）**。しまり強い、粘性弱い。
**黒・白・橙色スコリア**（φ1mm）を少量、赤色スコリア（φ1～3mm）を微量含む。灰色砂粒（φ1～2mm）が少量混ざる。
**Ⅸa層：7.5YR4/4（褐色）**。しまり強い、粘性弱い。
**赤・黒色スコリア**（φ1～3mm）を少量、白・橙色スコリア（φ1mm）を微量含む。
**Ⅸb層：10YR4/4（褐色）**。しまり強い、粘性弱い。上下層の間に斑状に堆積する。赤色スコリア（φ3mm）を微量含む。
**Ⅸc層：10YR4/4（褐色）**。しまり強い、粘性弱い。
赤（φ1～3mm）/黒・白色スコリア（φ1mm）を微量に、灰黒色スコリア（φ2～3mm）を少量含む。
X層　：10YR4/4（褐色）。しまり強い、粘性弱い。赤色・黒色・白色スコリア（φ1mm）を微量含む。

**第5図　基本土層図**


**参考文献**

稲田　晃　2008「八千代市の地形とその生い立ち」『八千代市の歴史』(通史編 上) 八千代市

遠藤邦彦・小宮雪晴・野内秀明・野口真利江　2022『縄文海進―海と陸の変遷と人々の適応―』冨山房インターナショナル

大原　隆　1996「新生代第四紀の房総」『千葉県の自然史』(本編1 千葉県の自然)　千葉県

岡崎(熊代)浩子　1997「下総台地の地質」『千葉県の自然史』(本編2 千葉県の台地)　千葉県

楠田　隆・楡井　久　1994「印旛沼の成因と性格」『印旛沼―自然と文化―』創刊号　印旛沼環境基金

佐倉市史編さん委員会編　2014『佐倉市史』(考古編) 佐倉市

財団法人千葉県文化財センター　1998「一般国道296号道路改築事業埋蔵文化財調査報告書1－八千代市赤作遺跡・阿蘇中学校東側遺跡－」調査報告第360集

千葉県教育委員会　2016「八千代市堂の上遺跡・上高野白幡遺跡・平沢遺跡」調査報告第15集

遠山成一・道上　文　2008「市域の中世遺跡」『八千代市の歴史』(通史編 上) 八千代市

橋本勝雄・堀部昭夫・加藤修司・笹生　衛　2008「原始・古代」『八千代市の歴史』(通史編 上) 八千代市

増渕和夫・杉原重夫　2010「古鬼怒湾における古環境変遷と貝塚をめぐる環境適応に関する諸問題」『環境史と人類』3 明治大学学術フロンティア

# 第２章　調査の成果

## 第１節　成果の概要

２次にわたる発掘調査の成果としては、縄文時代から弥生時代にかけての遺構・遺物が検出されている。第７図には、平成22年度に実施された調査成果を含めた遺構の分布状況を示した。

今回の調査で検出された遺構は、縄文時代早期の炉穴３基、弥生時代中期の竪穴住居跡１軒、環濠１条、その他近世の溝１条があり、このほか、縄文時代早期の遺物包含層１か所が確認されている。遺物は、わずかに１点だが旧石器時代石器が出土したほか、包含層から縄文時代早期の撚糸文系から茅山下層式までの土器が出土している。わずかだが、縄文時代の石器が出土している。

注目されるのは、弥生時代中期宮ノ台式期の環濠である。八千代市内では田原窪遺跡や道地遺跡の調査事例に次ぐ３例目となっている。平成22年度の調査成果と合わせて竪穴住居跡５軒が検出された。環濠内に竪穴住居跡が点在する、典型的な弥生時代中期の環濠集落の一部を確認することができた。

なお、遺構名は各調査次に番号を付しているため重複があり煩雑であること、また、近世以降の時期不明のピットなどがあることから、精査のうえ第２表に示したように改めて遺構番号を振り直した。

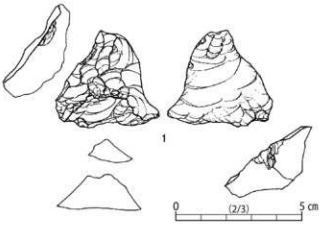
**第２表　遺構一覧表**

| 通し番号 | 掲載遺構番号 | 調査時遺構番号 | 遺構種別 | 時　期 | 位　置 | 最大長(m) | 最大幅(m) | 深さ(m) | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | SK001 | (２)SK001 | 炉穴 | 縄文時代早期 | 9N-03 | 1.69 | 1.50 | 0.29 | |
| 2 | SK002a･b | (３)SK011<br>(３)SK012<br>(３)SK013<br>(３)SK014 | 炉穴 | 縄文時代早期 | 2B-96 | 3.02<br>3.24 | 1.75<br>1.40 | 0.66 | ２基の炉穴 |
| 3 | SK003a･b | (３)SK015 | 炉穴 | 縄文時代早期 | 3B-07 | 1.26<br>－ | 0.96<br>1.10 | 0.23 | ２基の炉穴か? |
| 4 | SI001 | (３)SX001<br>(３)SX002 | 竪穴住居跡 | 弥生時代中期 | 9M-79 | 6.10 | － | 0.40 | |
| 5 | SD001 | (２)SD001<br>(３)SD001 | 環濠 | 弥生時代中期 | 9M-59～<br>9N-28 | 22.50 | 2.08 | 1.20 | |
| 6 | SD002 | (３)SD002 | 溝状遺構 | 近世 | 6H-26～<br>7H-38 | 22.00 | 1.90 | 0.60 | |

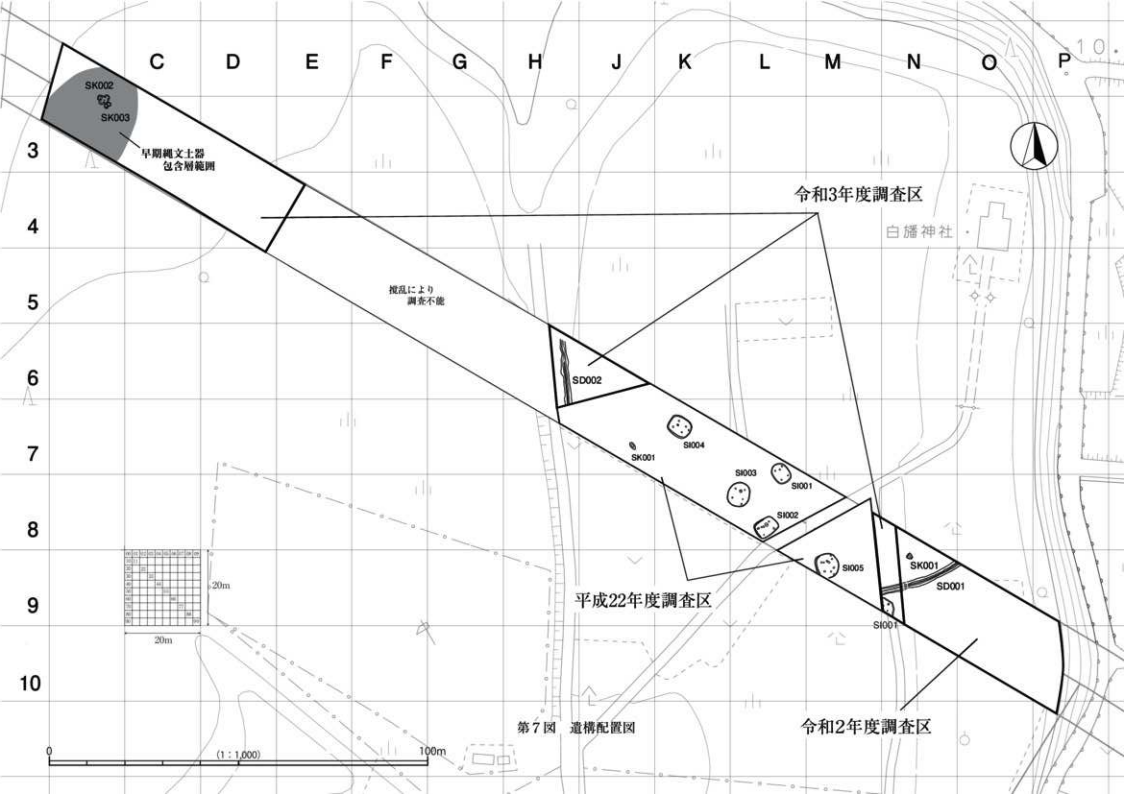
## 第２節　旧石器時代の遺物

### 単独出土（第６図、図版５）

調査区③の9O-84グリッドから１点が出土している。Ⅱ層中からの出土であるため、本来の出土層位は明らかではない。縁辺に二次加工が認められる彫刻刀形石器で、石材は灰黒色のメノウである。最大長38㎜・最大幅42㎜・最大厚15㎜・重量17.04gを測る。後期旧石器時代後半の下総ⅡC期（砂川期）に属すると考えられる。




第６図　旧石器時代の遺物


C
D
E
F
G
H
J
K
L
M
N
O
P
3
4
5
6
7
8
9
10
SK002
SK003
早期縄文土器
包含層範囲
令和3年度調査区
白旗神社
攪乱により
調査不能
SD002
SI004
SK001
SI003
SI001
SI002
SI005
SK001
SD001
SI001
平成22年度調査区
令和2年度調査区
20m
20m
0
(1：1,000)
100m

第７図　遺構配置図

## 第３節　縄文時代の遺構と遺物

### １　土　坑

縄文時代早期の炉穴３基を検出した。いずれも底面ないしは壁面が被熱し、焼土化した範囲がある。

**ＳＫ００１**（第８図、図版３）

調査区③の北西域の9N-03を中心に位置している。隅丸三角形様の平面形を持ち、最大幅は1.69m、確認面から床面までの深さは29cmを測る。底面上には焼土の堆積が２箇所認められた。底面西側はしまりのある焼土が厚さ３㎝程度堆積し、直下に被熱面が認められるという、炉穴特有の状況が認められた。一方で東側は、φ１㎜～２㎜の小粒子化した焼土が覆土に混在して散布していた。遺物は出土しなかったが、焼土の状況から炉穴と判断される。

**ＳＫ００２ａ・００２ｂ**（第９図、図版３・５）

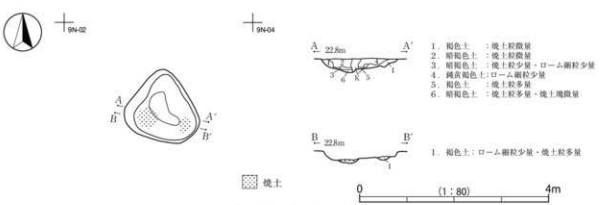
調査区①内の北側の2B-96グリッドを中心に位置している。周囲には早期の土器を主体とする遺物包含層が確認されている。覆土の堆積状況から，長軸3.02m、短軸約1.75mの楕円形のSK002aが、長軸3.24m・短軸約1.40mのSK002bの土坑よりも新しいと考えられ、前後して構築されている。それぞれの土坑には、底面よりも若干上位に焼土の堆積が認められた。縄文時代早期の炉穴に特徴的な土坑のあり方で、当初に掘られた炉穴の使用後、方向を変えて連続的に炉穴を構築したと考えられる。

遺物は覆土の上位から縄文土器片が出土している。いずれも表裏に貝殻条痕文が施されており，平底の底部が認められることから、早期の鵜ガ島台式以降の条痕文期に属すると考えられる。

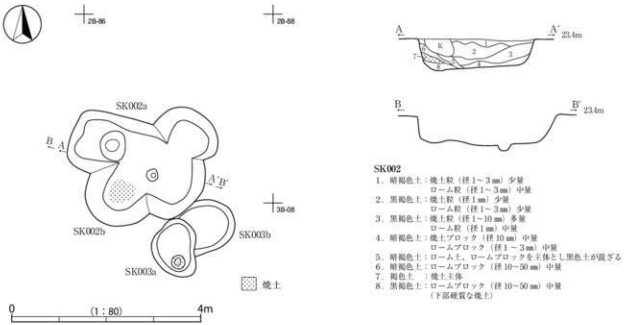
１は底部を欠くが、おおよそ全形が復元できた個体で、底部から直線的に開く形態の深鉢で、胎土には細かい繊維が含まれている。口唇部に連続した刻みが明瞭に施され、外面は茎束条痕、内面は貝殻条痕の可能性があり、施文具が表裏で異なっているようである。２は１とは別の個体で、棒状の工具による刻みが口唇部に施されている。３～９は胴部破片である。３は貝殻条痕、その他は茎束条痕であろう。10はやや上げ底となる底部で、底面にも茎束条痕が施されている。

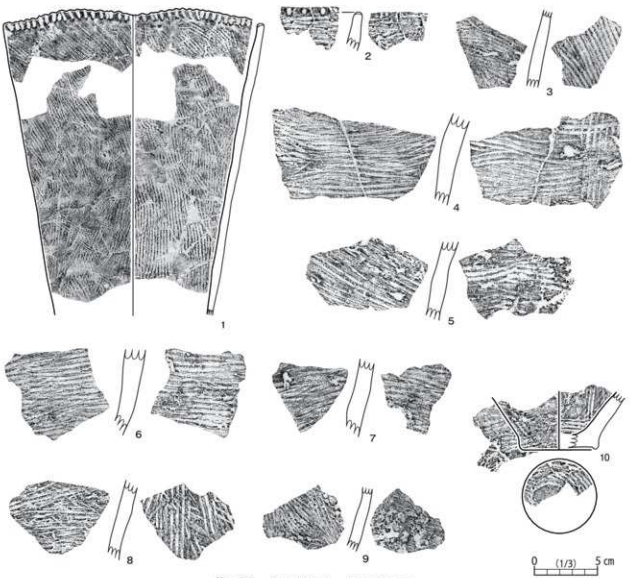
**ＳＫ００３ａ・００３ｂ**（第９図、図版３）

調査区①内の北側3B-07を中心に位置している。SK002に隣接しており、炉穴と判断される。２基の炉穴からなる可能性があり、長軸1.27m・短軸0.97mの楕円形のSK003aが、残存長1.20m・短軸長1.20mのSK003bを壊して構築されていると考えられる。SK003aの南側底面付近に焼土の堆積が認められた。遺物は縄文土器片が数点出土したが、小片のため図示できなかった。




第８図　ＳＫ００１




第9図　SK002・SK003

## 2　包含層出土の遺物（第10～15図、図版５～８）

最も北西部に位置する調査区①を中心に、Ⅱc層中から縄文時代早期の遺物がまとまって出土した。2B・2C・3B・3Cの大グリッドにまたがる範囲を主体としているが、調査区①の範囲には全体的に早期の遺物が散布していた。遺物の主体は、早期の縄文土器であるが、型式幅があり、撚糸文系土器、田戸上層式、野島式、鵜ガ島台式、茅山下層式などが認められる。また、微量だが、前期諸磯式や浮島式、中期前葉の土器、後期称名寺式などが出土している。その他は、微量の石器、土製品などが出土している。

**早期の土器**　１～８は撚糸文系土器の井草式で、いずれも破片である。１・２ともに口縁部外面に横位の縄文を施している。２は口唇部内面にも縄文を施しており井草Ⅰ式であろう。３・４は井草Ⅱ式の口縁部で、口唇部とその内面側上端にも縄文が施文されている。このほか同時期に属するものとして、５～７は胴部、８は尖底部である。９～73は、主に表裏に条痕を施す田戸上層式の後葉と考えられる土器群で、胎土に繊維が入っている。9・10・12・13は円孔文や突瘤文と呼ばれる棒状工具による刺突文が施されている。いずれの孔も貫通しているが、棒状工具を外面から差し込んで内面が瘤状に膨らんだ時点で止め、引き抜いてしまう突瘤文は９のみのようである。10の口唇部は連続した深い押し引き状の列点文である。12・13は口唇部に連続した刻みが施されている。11は表裏ともに擦痕状の調整痕を伴うもので田戸上層式にみられるものである。14は口唇部が内削ぎ状で、古手の様相を示す。15～23はいずれも口縁部に刻みを伴うものである。20は貝殻条痕と考えられるが、その他は茎束条痕などであろう。24は大型の尖底深鉢とみられ表裏は貝殻条痕であろう。26～71は表裏に条痕が施される胴部破片である。全体に繊維を含むものの、25～33は堅緻な焼成で器厚が薄い。小型品であろう。34～71は器厚がやや厚く、表裏に条痕を伴う。36・43・48などは貝殻条痕であろうが、その他は茎束条痕とみられる。型式を特定するのは難しく、田戸上層式の後葉から鵜ガ島台式あたりまでを含んでいると考えられる。72・73は尖底部で、73は小型土器である。74は口唇部が面取りされ浅い刻みが施されている。外面には密な条線、一部に微隆起帯が認められることから、野島式であろう。75～82は鵜ガ島台式である。いずれも沈線による襷状の区画文の交差部に竹管による円形刺突文が施され、内部に押引文が充填されている。82は底部を除いて器形が復元できたものである。片口となる注口突起は口縁部との接合はできなかったものの、同一個体と判断できる。器形は４段の文様構成となっている。口縁部には微隆帯による区画文で、交差部に竹管による円形刺突文が施されている。区画文には磨り消しによる無文帯と押引刺突文による充填文が施されている。上段のくびれ直下は無文帯で、丁寧に地文の条痕が磨消されている。またその下段には微隆帯による襷状の区画文が施されている。胴部下半は横位の茎束によるとみられる条痕が施されている。内面は擦痕状の調整痕が認められる。83～101は茅山下層式から茅山上層式と考えられる。いずれも胎土に繊維を多く含む。83は直線的に広がる深鉢で、２段のタガ状の隆帯を伴い、貝殻条痕を地文としている。口唇部は平らで、内外面の角には連続した刻みが施される。口縁部外面には幅広の凹線文が施されている。円形や弧線、渦巻文などからなり、単位性は感じられない。94は斜格子状に沈線が施されている。85・86は同一個体である。半截竹管による斜格子文が施されている。87・88は貝殻の背圧痕文が施されている。89～99は表裏に条痕文が施されるだけのものである。胴部にタガ状の隆帯を伴い、粗く刻みが施されている。89・91・94・96は貝殻条痕であろう。100は平底の底部である。101は隆帯を伴うが、隆帯の存在もあまり気にせずに貝殻条痕が全面に施されている。

**前期の土器**　102～118は前期の土器である。102は胎土に繊維を多く含む口縁部で、太い半截竹管による

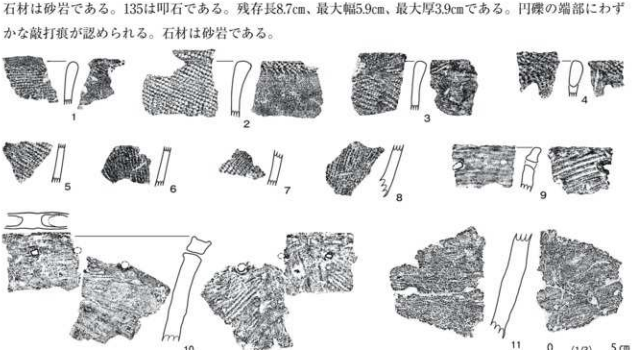
平行沈線が施されている。黒浜式であろう。103 ～ 109は諸磯a式の胴部破片である。いずれも堅緻で焼成は良好である。器形は朝顔形に開く深鉢であろう。103 ～ 106は同一地点から出土しており、同一個体とみられる。胴部上半には半截竹管による蛇行沈線が施され、垂下する列点文が４単位程度施されると思われる。胴部中段には、やはり半截竹管による多段の平行沈線が施され、胴部下半の縄文帯とを区画している。107 ～ 109はRL単節縄文が施されている。110 ～ 113は諸磯b式だが、112・113には地文に貝殻腹縁文が施されている。110にはLR単節縄文が、111・112・113には平行沈線文が施されている。114は浮島Ⅲ式の胴部で、波状貝殻文が施されている。115･116は焼成の良好な粗い条線が施された胴部で、前期後半であろう。117・118は諸磯c式もしくは十三菩提式の胴部下半であろう。粗い縦方向の条線が施され、117には菱形文が認められる。

**中期の土器**　119 ～ 123は中期前葉の土器である。119 ～ 121は阿玉台Ⅰa式の胴部であろう。隆帯が貼りつけられ等間隔に刺突文が認められる。122・123は加曽利Ｅ式であろう。縄文はいずれもRL単節縄文である。122は垂下する太い沈線が施されている。124・125は同一個体であろう。焼成は良好で櫛による蛇行した条線が垂下している。119などに並行する時期かもしれない。

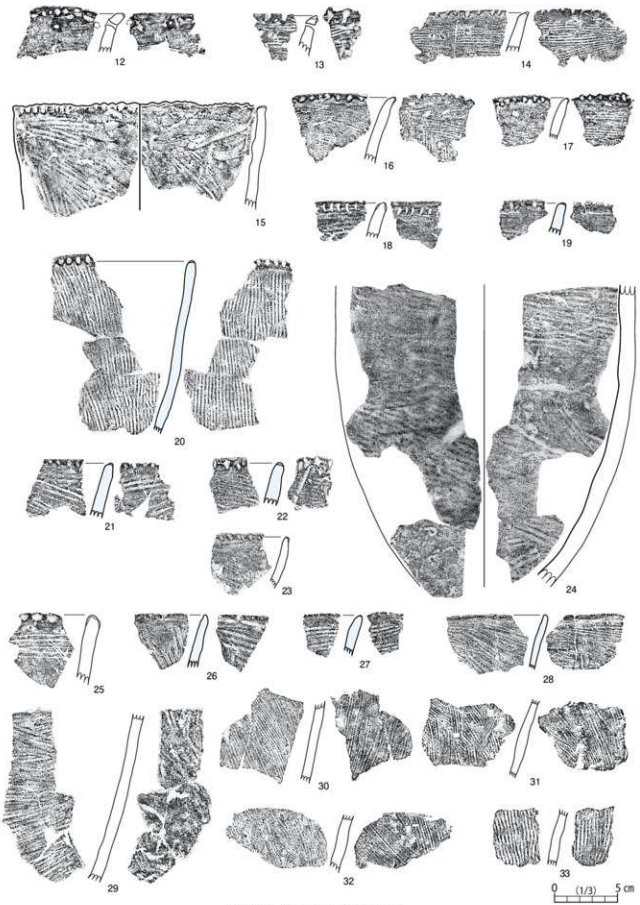
**後期の土器**　124 ～ 128は後期称名寺式の土器であろう。器厚が薄く、内外面は丁寧に調整されている。口縁部は沈線の区画による無文帯となり、その下に斜行する沈線が施されている。

**土製品**　129・130は中期の土器片を利用した土器片錘である。131は焼成を受けた粘土塊である。

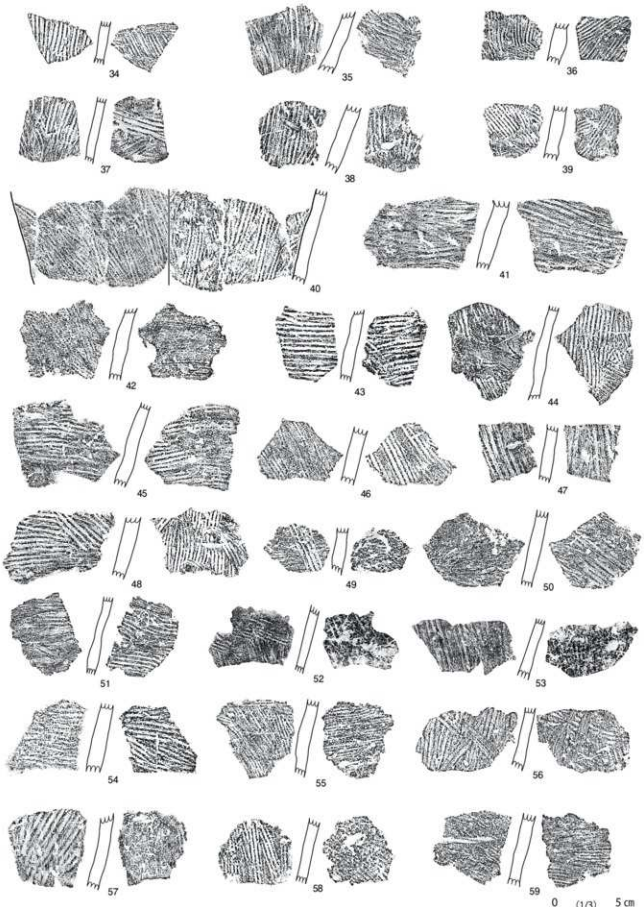
**石器**　わずかだが縄文時代の石器が出土している。132・133は石鏃である。132は最大長2.45㎝、最大幅1.60㎝、最大厚0.35㎝である。やや浅い抉りの凹基式で、二辺は緩い弧を描いている。石材はチャートである。133は最大長2.00㎝、最大幅1.85㎝、最大厚1.02㎝である。深めの抉りが入る凹基式で、右の脚がわずかに欠損している。あるいは両脚とも下端が欠損しているのかもしれない。石材はチャートである。134は短冊形の打製石斧であろう。残存長6.8㎝、最大幅は6.4㎝、最大厚は1.8㎝で基部を欠損している。片面はほぼ全面自然面を残している。円礫から剥片を取り、ほぼ剥離面のみに縁辺の調整を加えて整形している。石材は砂岩である。135は叩石である。残存長8.7㎝、最大幅5.9㎝、最大厚3.9㎝である。円礫の端部にわずかな敲打痕が認められる。石材は砂岩である。



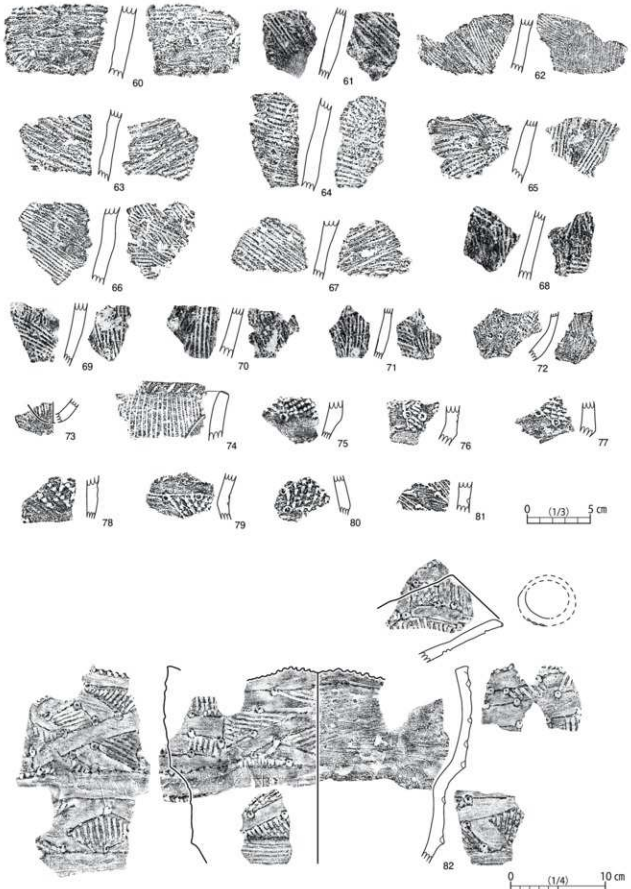

**第10図　包含層出土遺物（１）**



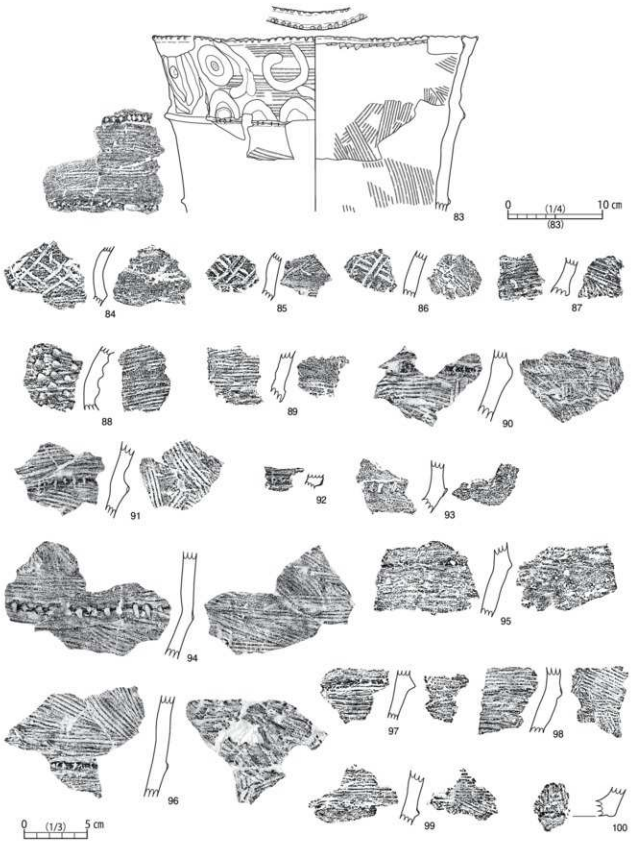

第11図　包含層出土遺物（2）



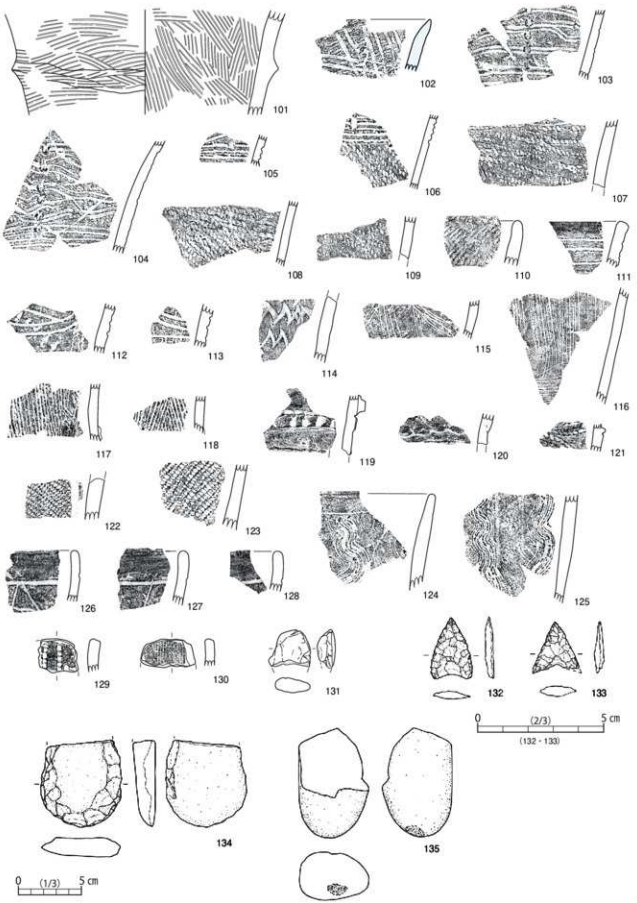

第12図　包含層出土遺物（3）




第13図　包含層出土遺物（4）




第14図　包含層出土遺物（5）




第15図　包含層出土遺物（6）

## 第４節　弥生時代の遺構と遺物

調査区③から弥生時代中期後半の宮ノ台式期の竪穴住居跡１軒と環濠の一部と考えられる溝１条が検出された。このほかに、顕著な撹乱のため、遊離した少量の弥生土器片が遺構外から出土している。

### １　竪穴住居跡

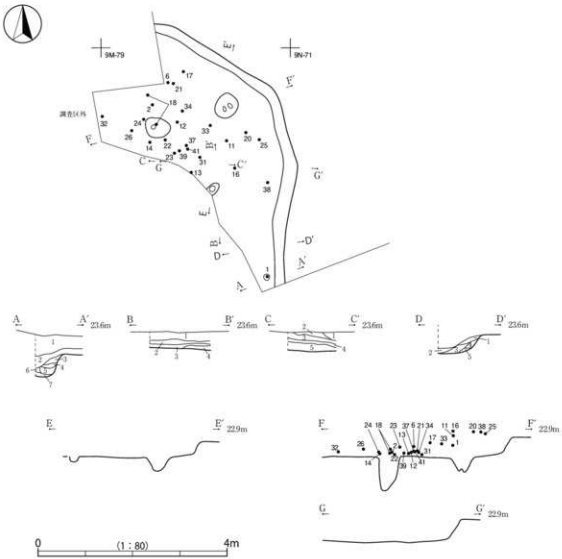
**ＳＩ００１**（第16～17図、図版２～４・８）

**位置・規模**　調査区③南西隅の9M-79グリッドを中心に検出された。おおよそ東側半分が検出され、それ以外は調査区外となっている。確認した最大長は6.1ｍで、南北方向に長軸を執る楕円形のプランが想定される。確認面から床面までの深さは約40㎝である。２基の柱穴のほか、浅いピット１基が伴っている。なお、当竪穴は、環濠の外側に位置しており、環濠の構築時期や他の竪穴住居跡との関係を探るうえで時期的な検討が必要である。

**出土遺物**　北半域に集中する傾向がある。

１は完形の壺である。高さ27.5㎝、口径9.2㎝、胴部最大径16.8㎝、底径6.8㎝を測る。外面は口縁部から肩部までが縦方向のハケ、胴部以下が横方向のハケにより調整され、底部にはさらに縦方向のハケが加えられている。口縁部付近は、口唇部の調整に伴って部分的に横方向のナデが重なっている。頸部下端から胴部上半にかけては、幅約２㎝の３段の縄文帯により装飾されている。縄文はLR単節縄文で、口唇部にも施文されている。胴部最大径付近から底部にかけて黒斑が１箇所付着している。底面はナデにより調整されており、木葉痕等は認められない。内面は、口縁部に横方向のナデによる調整が施されている。

２～９・17は壺の胴部上半部である。２は２段のLR単節縄文を横位に施した後、上下の縄文をナデ消したうえで沈線により区画し、さらにその中央に１本の沈線を施している。縄文帯の間は赤彩され、横方向のミガキが加えられている。内面はナデによる調整ののちに、横方向のミガキが施されている。３もこれと同様の特徴を示す。４は蛇行する沈線で区画文を施し、LR単節縄文が充填されている。縄文の上端側はナデ消されている。内面調整はナデであり、指オサエとみられる縦長の浅い凹みが２本並んでいる。５はこれと同一個体とみられる。６は外面全体に赤彩が施されている。右半部には黒斑が付着している。外面調整は横方向のハケで、不均一に横方向のミガキが重ねられている。上部には幅1～1.2㎝程度の曲線を描くLR単節縄文の縄文帯による装飾があり、上下はナデ消されたのちに沈線で区画され、さらに中央に１本の沈線が加えられている。７の外面はLR単節縄文が施されたのちに、一部が横方向にナデ消されている。内面調整はヘラ削りである。８は両面ともナデにより調整されている。外面は横方向の直線と左右両下がりの曲線を描く沈線で装飾されている。９の外面は櫛描により装飾されている。赤彩が施されているが、全体に黒味を帯びている。内面調整はナデである。17は内外面とも横方向のナデにより調整されている。10･24･41は壺の口縁部である。10は全面が横方向のナデにより調整されている。推定口径は19.2㎝を測る。24は内側に折り返された複合口縁を持つ。推定口径は19.6㎝を測る。外面調整は横方向のナデののち、頸部に縦方向のハケを重ねている。内面調整は横方向のナデののち、頸部に横方向のハケを加えている。口唇部は刻みにより装飾されている。41は全面がナデにより調整されている。胎土は灰白色を呈する。推定口径は5.2㎝と小さく、小型の壺と推測される。13・16・29は壺の肩部である。13は器面の荒れにより、内外面とも調整等は不明である。16の外面は縦方向のハケにより調整されるが、不均一にナデが重ねられており、さらに上半部には縦方向のミガキが加えられている。内面調整は、縦方向のナデである。29も外面が縦方向のハケで調整され、さらに下端部にナデが施されている。内面調整は器面の剥落により判然とし



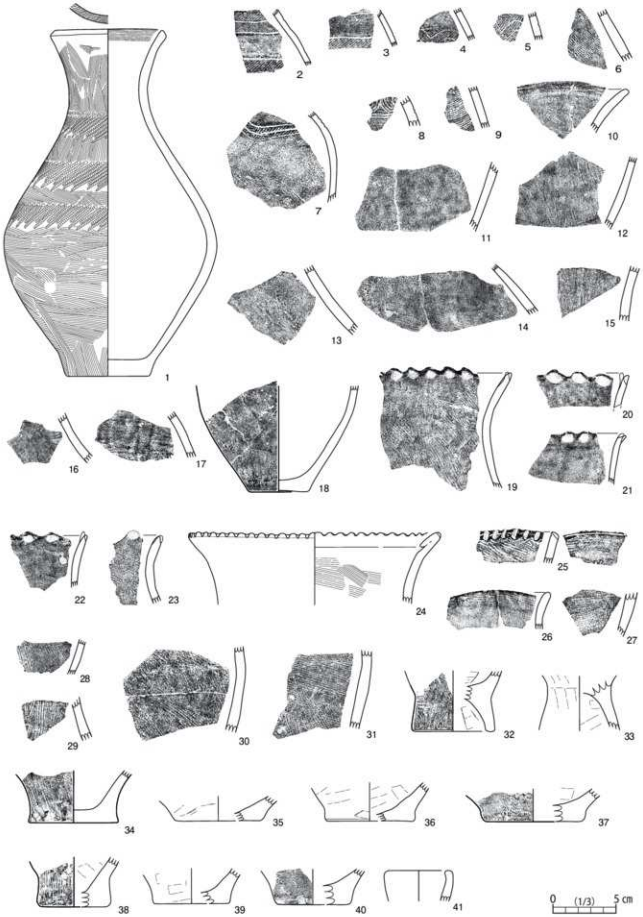

A-A′
1．表土
2．暗褐色土：炭化粒・赤褐色粒微量
3．黄褐色土：ロームブロック（径10㎝）中量
赤褐色粒・黒色粒（径1㎜）微量
ローム粒中量
4．暗褐色土：ロームブロック（径10㎝）少量
ローム粒（径1㎜）微量
5．黒色土：炭化物・焼土多量
ロームブロック（径5㎝）中量
6．黒褐色土：ローム粒（径3㎜）中量
赤褐色粒（径1㎜）微量
7．黒褐色土：ロームブロック多量
赤褐色粒（径1㎜）微量

B-B′
1．暗褐色土：炭化粒・赤褐色粒微量
2．黒褐色土：ローム粒（径3㎜）中量
赤褐色粒（径1㎜）微量
3．黒褐色土：ロームブロック多量
赤褐色粒（径1㎜）微量
4．褐色土：ロームブロックを主体とする
赤褐色粒（径1㎜）微量

C-C′
1．暗褐色土：炭化粒・赤褐色粒微量
2．黒色土：ローム粒（径1㎜）多量
黒色粒微量
3．黒褐色土：ロームブロック多量
赤褐色粒（径1㎜）微量
4．黒褐色土：ロームブロック多量
赤褐色粒（径1㎜）微量
5．褐色土：ロームブロックを主体とする
赤褐色粒（径1㎜）微量

D-D′
1．暗褐色土：ローム粒中量・赤褐色粒微量
2．暗褐色土：焼土粒（径5㎜）中量
3．黒褐色土：焼土粒（径5㎜）少量・炭化物（径10㎜）少量
ローム粒（径1㎜）中量・赤褐色粒（径1㎜）少量
4．黒褐色土：炭化物（径20㎜）多量
焼土粒（径5㎜）微量
5．黒褐色土：ロームブロック多量

第16図　ＳＩ００１(1)


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
0 (1/3) 5 cm

第17図　ＳＩ００１(２)

ない。

11・12・14・15・30・31は壺の胴部下半部である。11は横方向のナデで外面調整されるが、内面は剥落のため調整は不明である。12は外面が縦方向のヘラミガキ、内面が横方向のナデにより調整されている。14は縦・横方向のハケで外面を、横方向のナデで内面を調整されている。15の外面は縦方向のヘラ削り、内面は横方向のナデにより調整されている。30は外面を縦・横方向のハケで内面調整はナデである。31の外面調整は縦・横方向のハケ、内面調整はナデであるが、一部に縦方向のヘラナデが認められる。粘土の単位が器面の凹凸として残り、胎土は灰白色である。

19～23・26・28は甕の口縁部である。19～23は指頭押捺、28は刻みにより装飾されている。19の外面は、口唇部直下は横方向、それ以下は縦方向のハケによって調整されている。内面も口唇部直下は横方向のハケで調整されているが、以下は横方向のヘラナデによる。21・20は内外面ともに横方向のナデにより調整され、外面にはススが付着している。22は内外面ともに縦・横方向のヘラナデにより調整されている。23は内外面ともに横方向のハケにより調整されているが、口縁部直下は横方向のナデが加えられている。26は内外面ともに横方向のハケにより調整され、外面にはススが付着する。28は外面を縦方向、内面を横方向のハケで調整されている。25・27は鉢とみられる。25は口縁部に刻みによる装飾が施されている。外面調整は横方向のハケ、内面調整は横方向のヘラナデである。27は口唇部が研磨されており、壺の下半部を再利用している可能性がある。外面調整はナデののち横方向のハケ、内面調整はナデである。

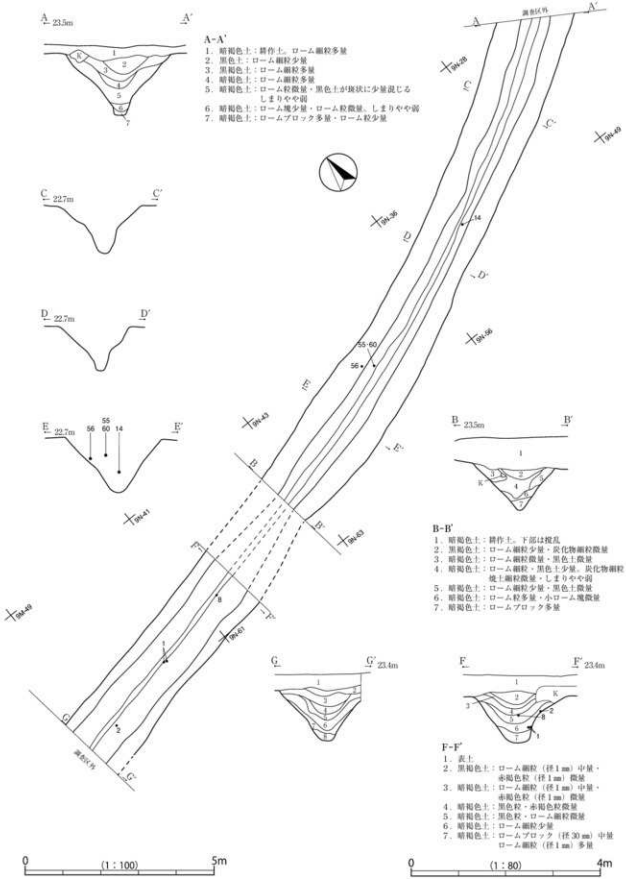
33は高坏の脚部である。外面調整はナデののち縦方向のヘラミガキが加えられている。内面調整は横方向のナデである。

18・32・34～40は底部である。18・39・40は壺、32は台付甕、34～38は甕とみられる。18は縦方向のハケののちヘラミガキにより外面調整されている。底面の調整はナデ、内面は器面が荒れるが残存部分にはナデによる調整が認められる。底径4.8cm。32は外面をヘラナデ、内面は体部・台部ともにヘラ削りにより調整されている。推定底径は6.6cmである。34はナデののち縦方向のハケで外面調整するが、最下端には粘土の接合時の指頭圧痕を残す。底面は大部分が剥落し、器面残存部分はナデで調整されている。内面調整は縦方向のヘラナデである。推定底径7.0cm。35は外面が縦方向のヘラナデ、底面がナデにより調整されている。内面は器面の荒れにより調整は不明である。推定底径は6.8cmである。36は外面を縦、内面を縦・横方向のヘラナデにより調整されている。底面調整はナデである。推定底径は6.8cmである。37は外面を縦方向のハケ、内面は横方向のヘラナデにより調整されている。底面調整はナデである。推定底径は7.7cmである。38は外面を縦方向のハケ、内面を縦方向のナデにより調整する。底面は剥落によって荒れており、調整は不明である。胎土を含め全体に黒色化し風化している。推定底径は5.4cmである。39は外面と底面をヘラナデで調整する。内面は器面が荒れているが、残存部分はナデが認められる。推定底径は6.0cmである。40の外面調整は縦方向のナデ、底面はナデ、内面は荒れて器面が残っていない。推定底径は5.6cmである。

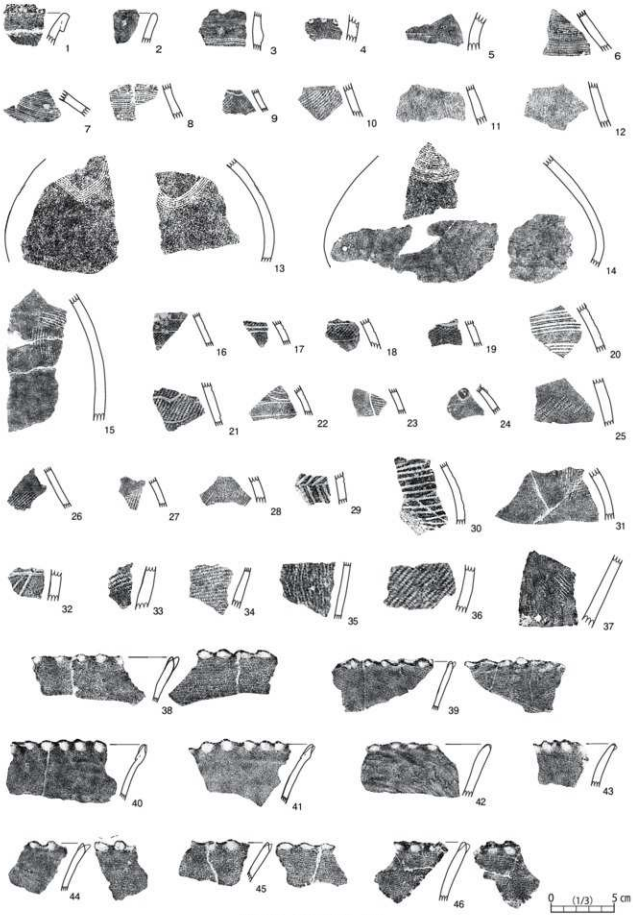
## 2　環濠

**ＳＤＯＯ１**（第18～20図、図版２～５）

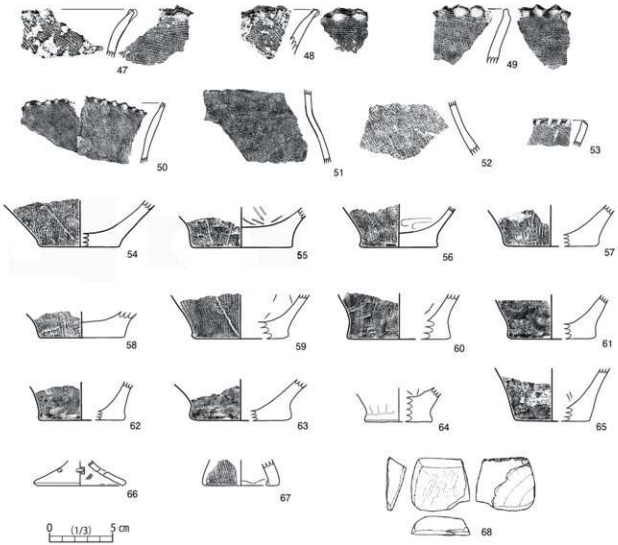
**位置・規模**　調査区③の西側にあたる9M-59～9N-28グリッドで検出された。東北東から西南西の方向に延びる溝で、平面形態は緩やかな弧状である。全長は22.5mを測り、両端とも調査区外へとさらに延びている。幅は検出面で最大2.08m（9N-43・53付近）、底面の幅は20cm～10cm程度である。壁は底面から0.8m～1.2mまでが残存している。断面形態はＶ字形であるが、底面から40cm～60cm程度までは急角度で、


A-A'
1．暗褐色土：耕作土．ローム細粒多量
2．黒色土：ローム細粒少量
3．黒褐色土：ローム細粒多量
4．暗褐色土：ローム細粒多量
5．暗褐色土：ローム粒微量・黒色土が斑状に少量混じる しまりやや弱
6．暗褐色土：ローム塊少量・ローム粒微量．しまりやや弱
7．暗褐色土：ロームブロック多量・ローム粒少量
B-B'
1．暗褐色土：耕作土．下部は撹乱
2．黒褐色土：ローム細粒少量・炭化物細粒微量
3．暗褐色土：ローム細粒微量・黒色土微量
4．暗褐色土：ローム細粒・黒色土少量．炭化物細粒・焼土細粒微量・しまりやや弱
5．暗褐色土：ローム細粒少量・黒色土微量
6．暗褐色土：ローム粒多量・小ローム塊微量
7．暗褐色土：ロームブロック多量
F-F'
1．表土
2．黒褐色土：ローム細粒（径1mm）中量・赤褐色粒（径1mm）微量
3．暗褐色土：ローム細粒（径1mm）中量・赤褐色粒（径1mm）微量
4．暗褐色土：黒色粒・赤褐色粒微量
5．暗褐色土：黒色粒・ローム細粒微量
6．暗褐色土：ローム細粒少量
7．暗褐色土：ロームブロック（径30mm）中量 ローム細粒（径1mm）多量
0 (1：100) 5m
0 (1：80) 4m

第18図　ＳＤ００１(１)


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
0 (1/3) 5cm

第19図　ＳＤ００１(２)




**第20図　ＳＤ００１（３）**

それより上位は緩やかに立ち上がっている。法面は若干の凹凸があるものの、概ね平滑であり、ピット等の構築は認められない。覆土は法面の風化や流入土等に由来すると思われる計６層程度の自然堆積層からなっている。遺物は下半部の覆土層に集中する傾向が認められ、出土点数は少ない。

本溝状遺構は、断面がＶ字形を呈し、平面形態が緩やかに弧を描くこと、弥生時代中期の遺物を伴うことから環濠の一部と考えられ、中期の竪穴住居跡群は当遺構よりも北側に展開している。

**出土遺物**　ほぼ弥生時代中期後半の土器破片で占められ、全形が復元可能な資料はなかった。１点だが磨製石斧の破片が出土している。

１～40は壺である。１は外側に折り返された複合口縁を持つ。外面調整は折り返し部分が横方向のナデ、以下は横方向のハケである。内面調整は横方向のナデ、口唇部にはLR単節縄文が施されている。小破片ながら大口径であることが想定され、広口壺とみられる。２も口縁部で、外面調整は縦方向のハケ、口唇部と内面は横方向のナデにより調整されている。

３～５は頸部である。３の外面には器面を２本の指の押しナデで作り出された、幅1.0cm程度の低い隆帯が認められる。隆帯の下端部には、擬流水文の一部とみられる横方向の櫛描文が重なっている。内面調整

は横方向のナデである。4は内外面ともに横方向のナデののちにミガキが加えられている。外面には刺突文（径約5㎜）の下半部分が、約5㎜間隔で3箇所認められる。5は最小径部分で、外面調整は横方向のハケである。内面は剥落により荒れているが、器面残存部分には横方向のハケが認められる。

6～12は肩部付近である。6・7は外面全体が赤彩されている。横方向の櫛描文とX沈線区画の右半部が認められることから、擬流水文の一部とみられる。内面調整は横方向のヘラナデである。8も擬流水文の一部とみられる。内面調整はナデである。9の外面はLR単節縄文が施された後に一部に縦方向のミガキが加えられ、さらに2本の沈線が横方向に施されている。内面は剥落により荒れているが、器面残存部分にはナデが認められる。内外面ともに器面が黒色化している。10の外面は横方向のナデによる調整ののち、LR単節縄文が施されている。内面調整は縦方向のヘラナデである。11の外面調整は縦方向のハケで、一部に縦方向のミガキが加えられている。部分的に赤彩が認められる。内面は剥落により荒れており、調整は不明である。12は外面全体に赤彩が施され、縦方向のハケにより調整されている。内面調整は横方向のヘラナデである。

13～33は胴部の上半部である。13の外面調整は横方向のナデののちハケで、さらに一部にLR単節縄文が施されている。内面調整は縦方向のナデのちヘラナデである。外面全体が赤彩されている。14も外面全体が赤彩されており、ナデののちに横方向のミガキ（横・斜め）により調整されている。上半部は櫛描文で装飾されている。内面は剥落により荒れているが、器面残存部分にはナデによる調整が認められる。15も外面全体に赤彩が施されている。外面調整は横方向のヘラナデで、胴部最大径付近では横方向のミガキが加えられている。上半部は櫛描文により装飾されている。一部に黒斑が認められる。内面調整は上半部が横、下半部が縦方向のナデである。以上は波状文施文の一群である。

16の外面は赤彩が施されており、ナデによる調整ののちにミガキが加えられている。上下が沈線で画された横位のLR単節縄文により装飾されており、中央にはさらに1本の沈線が施されている。内面調整は横方向のナデにより調整されている。17も同様の調整・装飾がされており、縄文帯上に3本の沈線が施されている。18もこれに類似するが、外面は黒色化しており、沈線は上下端の2本のみである。内面は剥落により荒れており、調整は不明である。19は外面を横方向のハケで調整したのちにLR単節縄文が施され、その上に横方向の沈線が加えられている。内面調整は横方向のナデである。20の外面調整は横方向のハケで、さらに2条の櫛描により装飾されている。内面調整は横方向のヘラナデである。21は外面全体にLR単節縄文が施され、横方向に曲線を描く2本の沈線により装飾されている。内面調整は横方向のヘラナデである。22の外面はLR単節縄文が施され，上部は曲線、下部は直線の沈線により装飾されている。一部に赤彩及び磨り消し縄文が施された箇所もある。内面調整は横方向のヘラナデである。23は外面を横方向のハケにより調整したのちにLR単節縄文が施され、さらにその施文部分が1本の沈線で縁取られている。黒斑が認められる。内面調整は横方向のヘラナデで、黒色化している。以上は、横帯縄文もしくは単位意匠文の一群とみられる。

24の外面調整は横方向のハケで、2点の刺突文（直径約2㎜）により装飾された、釦状の直径8㎜程度の粘土粒が貼り付けられている。内面は剥落により荒れているものの、粘土粒の背面には指オサエによる縦方向の凹面が認められる。25はナデによる外面調整ののちにLR単節縄文が施され、その上端部は横方向のヘラナデで消されている。内面は剥落により荒れており調整は不明である。26・27の外面も赤彩とLR単節縄文が施された後に、26では上端部が、27では下端部が磨り消され、さらに横方向のミガキが加えら

れている。内面調整はナデである。28は縦・横方向のハケにより外面調整され、器壁の半ば程度まで黒色化している。内面調整は縦方向のナデである。29はナデにより外面調整されたのちに、矢羽根状の沈線文が施されている。内面調整はナデである。30の外面もナデにより調整されたのちに、左下がりの沈線により装飾されている。内面は剥落により荒れているが、器面残存部分はナデにより調整されている。31はナデにより外面調整されたのちに、LR単節縄文が施されている。内面調整はナデののちに横方向のヘラナデである。

32～37は胴部下半部である。32の外面調整はナデで、2本の斜め方向の沈線が施されたのちに横方向の沈線1本が加えられている。内面調整はナデである。33はハケののちにナデにより外面調整され、さらにLR単節縄文が施されている。内面は剥落により荒れているが、器面残存部分はナデにより調整されている。34は外面全体にLR単節縄文が施され、内面は縦方向のナデにより調整されている。35は外面全体にRの撚糸文が縦方向に施される。内面調整は縦方向のヘラナデである。36は外面全体にLR単節縄文が施されている。内面は風化しており、調整は不明である。37は横方向のハケと縦方向のヘラミガキにより外面調整されている。黒斑が付着している。内面調整は縦方向のヘラナデである。

38～51は甕の口縁部で、50が棒状工具による刻み、それ以外は指頭押捺により装飾され、40・41には爪先の痕跡が深く短い沈線として残っている。38の外面調整は縦・横方向のハケで、口縁部直下には吹きこぼれ痕とみられる黒灰色の変色が認められる。内面調整は横方向のハケである。39は内外面とも横方向のハケにより調整されている。40はわずかに条のような痕跡が認められる箇所もあるが、器面の風化により外面調整は不明である。口唇部直下の1.5㎝程度まで折り返しにより肥厚させている。内面も器面がやや風化しているが、横方向のハケの痕跡が部分的に認められる。41は外内面とも器面がやや風化しており、調整痕は内面の口唇部に横方向のハケがわずかに認められる程度である。外面は灰赤色に変色している。42の外面は器面がやや風化しているが、横方向のハケによる調整が認められる。全体にススが付着し、褐灰色化している。内面も器面がやや風化しており、調整は不明である。43は内外面とも器面がやや風化しており、調整痕は明瞭ではない。内面には斑状にコゲが付着する。44も外面の器面がやや風化しているが、横方向のハケによる調整が部分的に認められる。口縁部直下には、吹きこぼれ痕とみられる黒灰色の変色が認められる。内面調整は横方向のハケである。45は胴部との接続部以下を縦、それより上位を横方向のハケで外面調整されている。内面調整は横方向のハケである。46は内外面ともに横方向のハケにより調整されている。47の外面は剥落によって荒れており、剥落箇所にもススが付着している。内面調整は横方向のハケである。48の外面も剥落によってやや荒れているが、器面残存箇所には横方向のハケが認められる。内面調整は横方向のハケである。49の外面は頸部以下を縦方向、それより上位は横方向のハケで調整されている。内面調整は横方向のハケである。以上の47～49には、口唇部にもハケによる調整が認められる。50は横方向のハケののちにヘラナデにより外面調整されている。内面調整は横方向のヘラナデで、斑状にコゲが付着する。51は上端部に認められる指頭痕から甕の口縁部と判断した。外面調整は横方向のハケで、粘土の接合部分がわずかな凹みとなって現れている。内面調整はナデである。

52は広口壺の頸部～胴部上半とみられる。外内面ともナデによる調整ののちにヘラナデが加えられており、頸部では横方向、胴部では縦方向に施されている。53は鉢の口縁部とみられる。外面は横方向のハケ、内面は横方向のナデにより調整されている。口唇部はハケによる調整ののちに、刻みによって装飾されている。

54 ～ 67は底部である。54 ～ 63は甕と思われ、63以外の外面はいずれも縦方向のハケにより調整されている。54は推定底径6.4cmで、底面と内面はナデにより調整されている。55は推定底径8.1cm、56は推定底径6.0cmで、いずれも底面と内面はヘラナデにより調整されている。57は推定底径6.8cmで、外面調整は縦方向の条の太いハケで、くびれ部はその上から軽くナデが加えられている。底面はヘラナデにより調整されている。内面は器面が荒れており調整は明らかではない。58は推定底径7.0cmで、底面と内面はナデにより調整されている。59は底径7.6cmで、底面・内面調整はヘラナデである。60は推定底径8.0cmで、底面はヘラナデ、内面はヘラナデのちヘラミガキにより調整されている。61は推定底径7.0cmで、底面・内面調整はヘラナデである。62は推定底径8.0cmで、外面をハケののち、くびれ部に軽い横方向のナデが加えられている。底面はナデにより調整されている。内面は荒れていて調整は不明である。63は推定底径8.0cmで、外面・底面はヘラナデにより調整されている。内面は器面が荒れており調整は不明である。

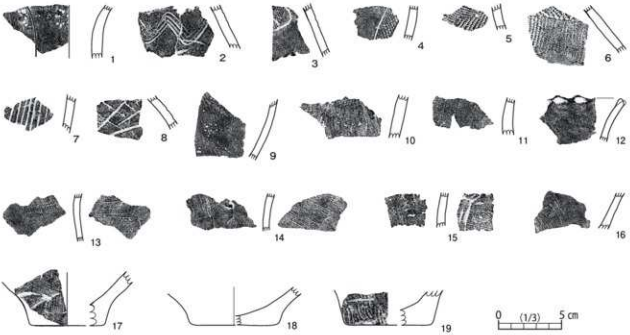
64・65は壺とみられる。64は外面をナデ、底面・内面はヘラナデにより調整されている。推定底径は7.0cmである。65は外面・底面・内面ともヘラナデにより調整されている。底径6.0cmである。66は台付甕の脚部である。外面は横方向のハケ、底面と内面はナデにより調整されている。67は弥生時代終末期から古墳時代初頭に属する小型の高杯の脚部である。外面は横方向のナデののち横方向のミガキが加えられている。内面は横方向のナデののちヘラミガキが施されている。内側から外側へ径５mm程度の孔が１ヶ所開けられている。

68は磨製石斧の破片で、刃部がわずかに残存している。最大幅4.2cm、最大厚0.15cm、残存長4.2cmである。石材は砂岩である。縄文時代の石斧の可能性もある。

### 3　遺構外出土弥生土器（第21図、図版８）

SD001が位置する調査区③を中心に、弥生時代中期の壺や甕の破片が表土やⅡ層、撹乱層などから出土している。本来は、包含層を形成しない時期であるが、後世の耕作などによる撹乱が顕著であるため、竪穴住居跡などの遺構が損壊したことなどによって本来の位置から遊離して出土していると考えられる。遺物量は多くはない。一部を図示した。

１～ 11は壺の頸部から胴部にあたる破片である。１は壺の口縁部近くの頸部で、外面はナデで内面は剥落が顕著である。２は地文に斜方向のハケメを施した後、４本の櫛による波状文が施されている。内面はナデにより調整されている。３は細かいRL単節縄文を施文し、沈線で区画文を施している。内面はナデ調整である。４も３と同様に縄文施文後に沈線の区画文を施すものであろう。内面は剥落が顕著である。５は異なる原体による羽状縄文が横位に施されている。小さな刺突文が施されている。内面はナデ調整である。６はRL単節縄文が２段施文されている。上は横位に下は斜方向の施文である。内面はナデ調整されている。７は斜行する条線が施され、一部に縄文が認められる。内面の剥落が顕著である。８は斜格子状に沈線文が施されている。内面はナデ調整である。９は壺の胴部でハケメを施した後、ミガキを施している。内面の剥落が顕著である。10は胴部下半で縦方向のミガキが施されている。内面の剥落が顕著である。11は頸部の破片で赤彩されている。ミガキが施されている。内面はナデ調整されている。12 ～ 16は甕である。12は口縁部破片である。指頭押捺による刻みが施されている。外面はナデ、内面はハケ調整されている。13は胴部破片である。12と同様の調整である。14・15は内外面ハケ調整されている。16は内面ナデである。17・19は甕の底部である。17には内外面にハケ調整が認められる。19は外面のみハケ調整されている。18は壺の底部であろう。内面の剥落が顕著である。




第21図　遺構外出土弥生土器

## 第５節　その他の遺構と遺物

### １　溝状遺構

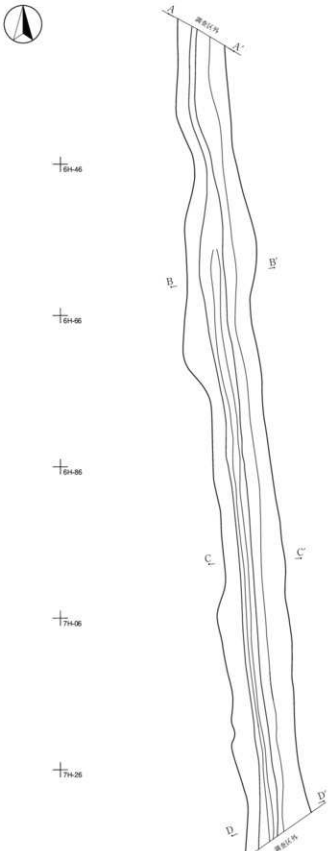
**ＳＤ００２**（第23図、図版３）

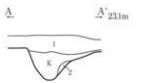
調査区②西側の6H-26 ～ 7H-38のグリッドを中心に検出された。南北方向へ直線的に構築されており、北に下る小谷を通る赤道に沿って伸びている。長さは22.0mを測り、両端とも調査区外へとさらに延びる。幅は検出面で最大約1.9m、底面は10cm～ 20cm程度である。底面から0.5m ～ 0.6mまでの部分が残存している。覆土の上半が時期的に新しい覆土であること、さらに断面形状から、近世以降の溝ないしは道路状遺構の可能性がある。なお、検出当初は環濠と考えられるSD001と連続あるいは関連する弥生時代の溝と想定されていた。ただし、平成22年度の発掘調査範囲からは、環濠は確認されていない。当遺構の位置あたりに本来は環濠があり、重なっている可能性もある。

### ２　遺物（第22図、図版５）

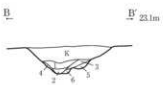
１は泥面子である。頭頂部の一部を欠いている。猿あるいは頭部にターバンのような布を巻いた異人を模しているとみられる。残存長2.27cm、最大幅1.91cmである。

第22図　その他の遺物

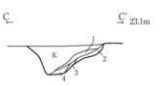


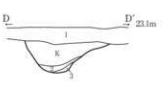

1．表土
2．暗褐色土：ロームブロック（径1～10mm）微量・
ローム粒（径1mm）多量




1．黒褐色土：ロームブロック（径5～10mm）多量
ローム粒（径1mm）多量
炭化物粒（径5mm）微量
2．暗褐色土：ロームブロック（径5mm）中量
ローム粒（径1mm）少量
3．暗褐色土：ロームブロック（径10mm）少量
ローム粒（径1mm）少量
4．暗褐色土：ロームブロック（径30mm）中量
ローム粒（径1mm）少量
5．暗褐色土：ロームブロック（径10mm）多量
ローム粒（径1mm）多量
6．暗褐色土：ロームブロック（径5mm）中量
ローム粒（径1mm）中量




1．黒褐色土：ロームブロック（径5mm）少量
ローム粒（径1mm）多量
2．暗褐色土：ロームブロック（径30mm）中量
ローム粒（径1mm）少量
3．黒褐色土：黒色粒（径1mm）少量
ローム粒微量
4．暗褐色土：ロームブロック（径5mm）少量
ローム粒（径1mm）中量




1．表土
2．黒褐色土：ロームブロック（径10mm）少量
3．暗褐色土：ロームブロック（径30mm）多量
ローム粒（径2mm）少量

0 (1：100) 5m

0 (1：80) 4m

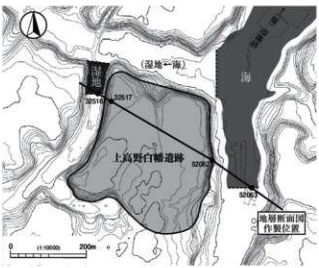
第23図　ＳＤ００２

# 第３章　総括

## 第１節　縄文海進最大期頃の地形環境と遺跡立地（第24・25図）

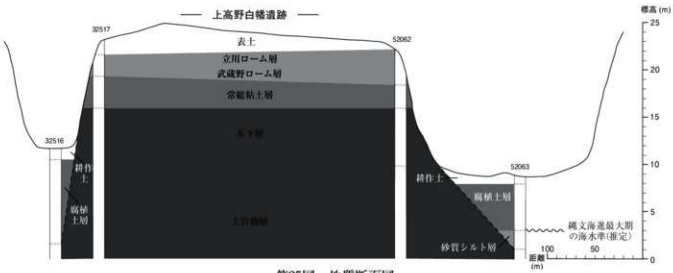
今回の調査で、上高野白幡遺跡から出土した縄文土器の大半は早期に属しており、そのうち最も多かったのが、早期後半の条痕文系土器である。被熱の痕跡と焼土を伴う３基の炉穴は、土器相を反映したものである。

縄文時代早期は、縄文海進による海岸線の変動が進行していた時期でもある。近年の研究によれば、海水準の上昇は早期後葉に最大となり、中期初頭以後に海退へと転じたとみられている（遠藤ほか　2022）。当遺跡で認められている土器型式を当てはめれば、井草Ⅰ式から鵜ガ島台式期までが海水準上昇の途上にあり、茅山下層式から黒浜式期までが最大期に位置づけられる（一木　2012）。幸いにして当遺跡を取り囲む谷底平野ではボーリングによる地質調査の実績があり、その中には縄文海進期の地形環境が窺える事例が認められる。これらを資料として、縄文時代早期頃の地形環境から当遺跡が帯びていた性格の一側面を捉えてみたい。




第24図　縄文海進最大期頃の地形想定図

分析に際して使用したボーリングデータは、「ちば情報マップ」上でWEB公開されている地質柱状図マップ（https://map.pref.chiba.lg.jp/pref-chiba/PositionSelect?mid=6300）から取得したものである。第24・25図に示したように、当遺跡が所在する台地を経由して北西―南東方向にほぼ直線上に並ぶ、４本のデータを使用した。整理番号（以下略）52063は遺跡東側の谷の中央部、52062・32517はそれぞれ台地の東西縁辺部、32516は西側の谷の中央部に位置する。




第25図　地質断面図

台地上の２本では、ローム層の下位に堆積する淡褐灰色の火山灰質・凝灰質粘土層が常総粘土層に比定される。以下は細砂層が標高０ｍ以下まで堆積するが、柱状図の情報からは木下層と上岩橋層との分別は難しい。ただし両地点とも標高約４ｍ付近で地盤の強度を示すＮ値が高くなっており、ここに何らかの層理面の存在が想定される。

東側の谷に位置する52063では標高約１ｍで上岩橋層とみられる細砂層が認められ、これは当地点における沖積層堆積以前の谷底にあたる。この直上に堆積する暗灰色の砂質シルト層は、その特徴から市史研究において「ｂ層」として分類されている（稲田　2008）、古鬼怒湾底の海成層とみられる。当層の上限高度は標高約３ｍであり、これは東京湾（＋2.5 ～＋３ｍ）や霞ヶ浦を含む利根川低地（＋2.5ｍ）での縄文海進最大期における想定海水準とも整合的である（遠藤ほか　2022、田辺ほか　2016）。これより上位は、海退による離水後に堆積した腐植土層（泥炭層）及び現代の耕作土である。対して西側の谷に位置する32517では、谷底直上から腐植土層（泥炭層）が堆積しており、砂質シルト層は認められない。以上のことから縄文海進最大期頃の当遺跡周辺では、東側の谷には古鬼怒湾に連なる海水域が、西側の谷には湿地帯が形成されており、両者の中間にある北側の谷は海域から陸域への遷移帯であったことが想定される。

縄文海進期の当遺跡に活動の痕跡を残した人々は、眼下に流れ込む海の利用を目当てに当地に滞在したことがまずは推察される。印旛沼方面の海域から当遺跡までは、小竹川沿いの谷を浸していた入江により接続されていた。遺跡の所在する台地の北東部からはこの入江を望むことができ、このような景観上の特性も選地に寄与したのであろう。

しかし、遺跡と海とを隔てる台地東側の崖面は傾斜度45°前後を測る急斜面であり、日常的な昇降には難があるように思われる。そこで注目されるのが、台地の西半分を緩やかに切り込む、遺跡南側の谷の存在である。この谷は湿地が形成されていた西側の谷に接続しており、湿地はさらに北側の谷で現在の印旛沼へと接続していた。人々はこの谷を縫う経路を通って、水域へと降りていたのであろう。

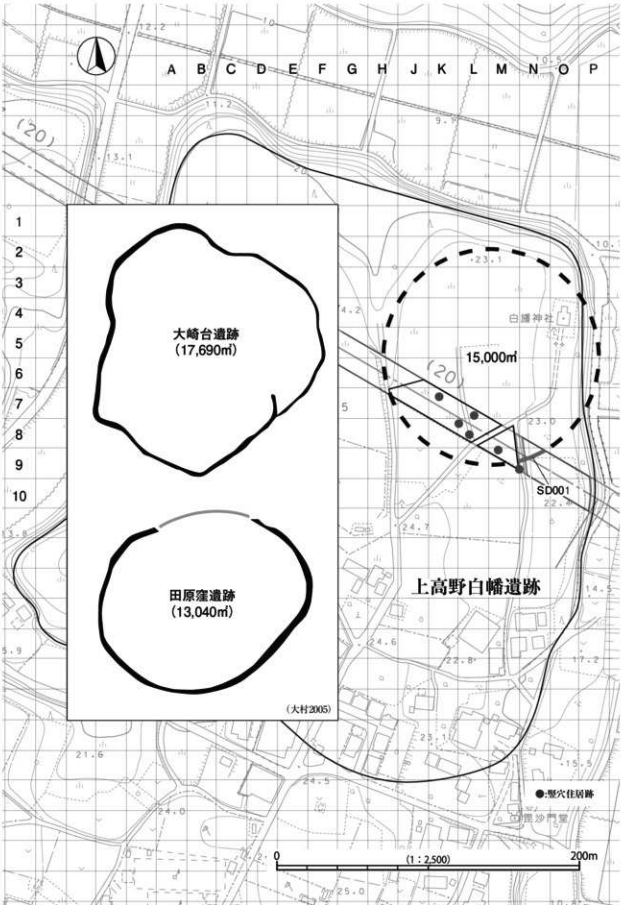
上高野白幡遺跡で出土した早期の土器は、撚糸文系土器から茅山下層式土器までが認められ、断続的ではあるものの長期にわたり人々がこの地を訪れていることから、入江を眼前に臨むことができ、かつ水域へのアクセスが容易なこの地を拠点としていた可能性がある。

## 第２節　環濠の性格（第26・27図）

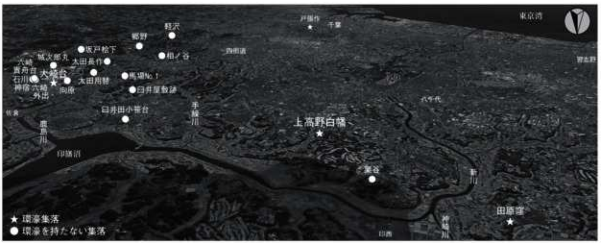
弥生時代の溝であるSD001は、Ｖ字形の断面形態と弧を描く平面形態から、環濠の一部と判断される。今回の調査によって、佐倉市大崎台遺跡・八千代市田原窪遺跡などに続く、印旛沼周辺地域における環濠集落遺跡の新事例が追加されたこととなる。

残念ながら、SD001は調査区③内で22ｍ分ほどが確認されたに過ぎず、環濠の全体像は明らかではない。ここでは仮に大崎台遺跡（17,690㎡）・田原窪遺跡（13,040㎡）の環濠内の面積の間を採って、当遺跡ではこれを15,000㎡と仮定し、直径122.5ｍの円をSD001と重なるように第26図に示してみた。東側こそ大半が崖面に入り込んでしまうものの、北側は台地平坦面を縁取るように回り、西側は北側の崖面を切り込む浅い谷と接する付近で南側に回り込む状況が読み取れる。検討材料に乏しいが、この円のラインがおおよその環濠の位置と想定しておきたい。

なお、本書で報告した竪穴住居跡のSI001は、環濠の外側に位置している。環濠外に構築された竪穴住居跡は田原窪遺跡でも認められており（秋山　1996）、環濠の構築時期の問題や、この竪穴の機能については




第26図　環濠の想定位置




★ 環濠集落
● 環濠を持たない集落

**第27図　印旛沼周辺地域における宮ノ台式期の集落遺跡の分布**

別途、検討が必要であろう。

第27図は、印旛沼周辺地域を北から南へ眺めた鳥観図に、宮ノ台式期に属する集落遺跡の位置を示したものである。この時期の集落遺跡は、印旛沼の南岸側に集中している。当遺跡の西側に位置する田原窪遺跡とは約4.5㎞離れており、間には新川の流れる谷底平野が形成されている。また、田原窪遺跡を載せる台地は、北側を神崎川の谷底平野で画されている。両遺跡の中間に位置する栗谷遺跡は、上高野白幡遺跡と同一の台地上に所在している。ただし、この遺跡は後期を主体としており（宮沢ほか　2003)、宮ノ台式期では上高野白幡遺跡の方が大規模である。手繰川の谷底平野を挟んだ東側の台地には方形周溝墓群が認められる臼井屋敷跡遺跡があり（(財)印旛郡市文化財センター　1996)、近傍に居住域の存在が想定される。上高野白旗遺跡からは約６㎞の距離になる。さらに臼井屋敷跡遺跡から約３㎞東には、大崎台遺跡を中心とした遺跡群が、鹿島川とこれに合流する高崎川とに挟まれた台地上に展開している。鹿島川を遡った先の台地にも、郷野遺跡などの遺跡群が分布している。大崎台遺跡からは約4.5㎞を測る。

これらの河川は、いくつかの支流を集めながら印旛沼へと注ぐ主要河川である（なお現在の新川は、開削工事により東京湾側に流れる花見川と接続している)。台地はこれらの河川が形成した谷底平野で画され、そこに地域の核となるような集落遺跡が１箇所ずつ認められる。各遺跡の間隔は３㎞～６㎞程度であり、地形的な要件等により偏りはあるものの、一定の距離感を確保しようとする意識が窺える。以上のような分布のあり方は、弥生時代中期の宮ノ台式期の印旛沼沿岸地域では、台地を地理的な単位とした地域社会が営まれていたことを想起させる。

下総地域に限らず、弥生時代中期後葉宮ノ台式期になると集落が増加し、先に示した大崎台遺跡のような大規模な環濠集落も現れるようになる。それはとりもなおさず、印旛沼やそれを取り巻く谷底平野に、いわゆる弥生の小海退を含む、縄文海進最大期以降の海退の影響によって、稲作に必要な可耕地が出現したことによるのだろう。ただし、大崎台遺跡のように中期後葉を通して継続する集落は少なく、田原窪遺跡をはじめとする当地域の環濠集落は後期へ継続することなく終焉を迎えてしまう。上高野白幡遺跡も集落の動態を探るには資料に乏しいが、同じような経緯をたどる可能性が高く、後期になると印旛沼からやや奥まった萱田遺跡群の権現後遺跡や白幡前遺跡などで継続性の高い集落が現れる。集落の動態は生産基盤に左右されている可能性が高く、印旛沼周辺の谷底平野における地理的環境の変化が、大きく影響しているものと推測される。

## 第３節　千葉県域における北島式系土器の新事例（第28図・29図）

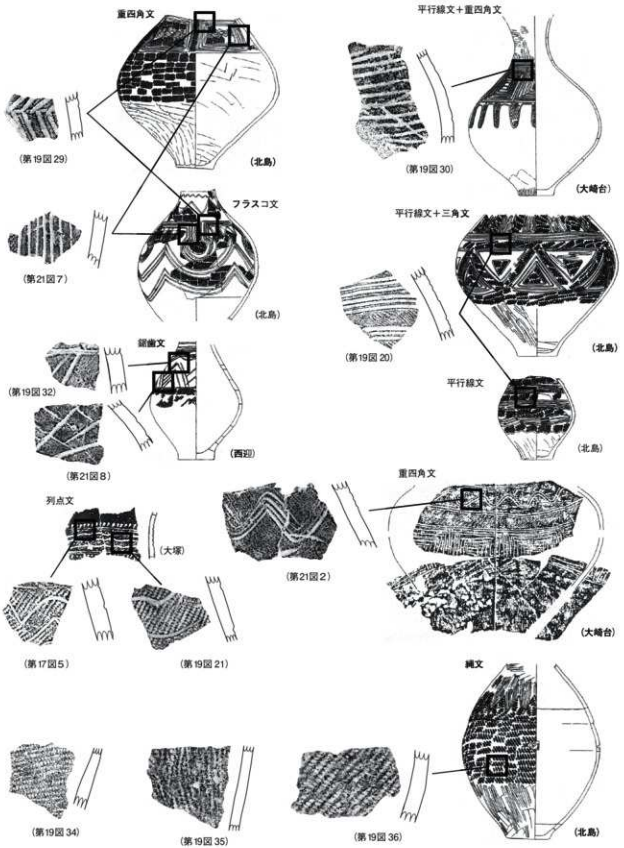
今回の調査によって出土した弥生土器の中には、北武蔵を主な分布域とする、「北島式」の特徴を持つものが認められる。

北島式は、埼玉県熊谷市に所在する北島遺跡を標式遺跡として設定された、弥生時代中期後半の土器型式である（吉田　2003）。北武蔵の土器編年上では上敷免新式と埼玉県用土平遺跡出土土器群との間に位置づけられ、南関東の宮ノ台式SiⅢ期（安藤　1990）と併行する（馬場　2008）。北島遺跡では中部高地系の栗林式（系）が多数認められるとともに、台付甕・無頸壺・鉢・高坏・蓋は中部高地系ほか他系統の型式で占められている。北島式は、栗林式の影響を受けつつも在地の伝統を遺している、壺・甕・筒形土器のみが設定の対象器種となっている（吉田　2003）。このような型式設定の背景と、北島式のみから構成される土器群を出土する遺跡が存在しない状況から、「北島式とは、北島遺跡の出土土器の一部を指すものである」とする評もある（松本　2004）。当遺跡の資料については、北島式の周辺地域への拡散や影響に関する研究も進んでいないことも考慮して、ひとまずは「北島式系」と呼んでおくことにしたい。

当遺跡出土の北島式系土器は、第28図に集成したように、いずれも壺とみられる。北島式の壺の文様は、内部に波状文・直線文・斜格子文等を充填施文した重四角文、三角文系、フラスコ文、弧線文・波状文と組み合う平行線文、区画文様として用いられた列点文、縄文を充填施文する頸部に施された鋸歯文が、その要件として整理されている（吉田　2003）。これらの諸文様を持つ当遺跡出土の資料と、北島式（系）の事例とを対照してみよう。

第19図29は、箆描の沈線による横線と垂線の端部が合わさっている。重四角文の左上の角、あるいはフラスコ文の右上の角の部分に相当するとみられる。第21図７の縦方向に連続する箆描の沈線も、重四角文またはフラスコ文の垂線と想定される。第19図30は複数の箆描の沈線が横方向に施文されている。平行線文、あるいは大崎台遺跡１号方形周溝墓資料のように、平行線文と重四角文の上辺側が離隔なしに施文された箇所であろう。第19図20は２段の平行線文、あるいは横方向の沈線を用いた種々の文様の一部であろう。第19図32と第21図８は、西遅遺跡（群馬県前橋市）13号住居跡出土資料に認められる、縄文充填がされていない鋸歯文に類似する。あるいは斜行子文を持つ甕の一部かもしれない。第17図５・第19図21は、縄文を地文に単線の箆描沈線による波状文を重ねている。大塚遺跡（神奈川県横浜市）のｙ-44号住居跡などでの類例のように、列点文と組み合っていたものであろうか。対して縄文を地文とせずに箆描沈線で複数条の波状文を描く第21図２は、大崎台遺跡（千葉県佐倉市）の第279号住居址に類例がある。第19図33～36は全面に縄文または撚糸文が施された胴部下半の破片で、北島式はこの部位に縄文を多用する傾向があり、また縄文を主文様として胴部に広く施文されるものもある。第21図１は無文の頸部であるが、内面器壁の荒れ具合（表層がクレーター状に剥落している）がここまでで検討した資料群と類似しており、北島式系として取り扱っている。

第29図には、2003年時点での集成（吉田　2003）をもとに、千葉県内において北島式系が認められた遺跡の位置を示した。分布域は東京湾最奥部東岸域（⑥～⑨）と、当遺跡を含む印旛沼周辺（①・③～⑤）に偏っている。これらとは分布を異にする下花輪荒井前遺跡（②）の北島式系は、2021年に報告されたもので（千葉県教育振興財団　2021）、遺跡は北島式系の出土事例が多い大宮台地とは江戸川を挟んで対面する位置にある。また同遺跡は中川低地と古鬼怒湾とを隔てる位置にもあり、印旛沼周辺地域への北島式系の波及の道筋を示唆させる。東京湾最奥部東岸域の北島式系は印旛沼周辺を経由してもたらされた可能性もあるが、




上高野白幡遺跡の出土資料　S=1/2
他遺跡出土資料の図は吉田 2003 から二次利用し、掲載サイズのまま転載した

第28図　上高野白幡遺跡出土の北島式系土器

河川・海上交通により北武蔵と直接的な関係を持っていたことも想定されよう。

北島式は研究事例が少なく、さらには成立基盤や編年的位置をめぐる問題が議論の中心になっている。千葉県北西部地域では御新田式土器などいわゆる北関東系土器なども混在してみられる調査事例が多く、その判別が難しいことや、当遺跡のように断片資料にとどまる事例が多いのも実態をつかみにくくしている。

点的に少数の北島式系が認められる南関東での様相は、ほとんど明らかにされていない。当遺跡から出土した北島式系土器は、房総半島における様相を知るうえで、貴重な出土例といえるだろう。

**第29図　千葉県域の北島式系土器出土遺跡**


**参考文献**

秋山利光　1996「田原隍遺跡」「千葉県の歴史」（資料編考古２）：230-231　千葉県

安藤広道　1990a「神奈川県下末吉台地における宮ノ台式土器の細別－遺跡群研究のためのタイムスケールの整理－上」『古代文化』42（6）：28－38

安藤広道　1990b「神奈川県下末吉台地における宮ノ台式土器の細別－遺跡群研究のためのタイムスケールの整理－下」『古代文化』42（7）：13－24

稲田　晃　2008「八千代市の地形とその生い立ち」「八千代市の歴史」（通史編上）：1-28、八千代市

遠藤邦彦・小宮雪晴・野内秀明・野口真利江　2022『縄文海進－海と陸の変遷と人々の適応－』冨山房インターナショナル

大村　直　2005「市原市の環濠集落」『第20回市原市文化財センター遺跡発表会要旨』：8-13

田辺　晋・堀　和明・百原　新・中島　礼　2016「利根川低地における「弥生の小海退」の検証」「地質学雑誌」122（4）：135-153

公益財団法人千葉県教育振興財団　2021「流山市下花輪荒井前遺跡２－水質試験棟築造に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－」調査報告第786集

馬場伸一郎　2008「弥生中期・栗林式土器編年の再構築と分布論的研究　弥生交易論の可能性を視野に入れて」『国立歴史民俗博物館研究報告』145：101-174

財団法人印旛郡市文化財センター　1996『臼井屋敷跡遺跡　市道1-32号線（吉見工区）埋蔵文化財調査委託』調査報告書第107集

一木絵理　2012「日本における縄文海進の海域環境と人間活動」東京大学大学院新領域創成科学研究科社会文化環境学専攻学位論文

松本　完　2004「シンポジウム『北島式土器とその時代』を振り返って」『埼玉考古』39：123-130

宮沢久史ほか 2003「千葉県八千代市栗谷遺跡　（仮称）八千代カルチャータウン開発事業関連埋蔵文化財調査報告書1」（第２分冊）　大成建設株式会社

吉田　稔　2003「北島式の提唱」『埼玉考古学会シンポジウム　北島式土器とその時代－弥生時代の新展開－（埼玉考古別冊７）：3-36

図版 1

上高野白幡遺跡周辺航空写真（1989 年撮影）

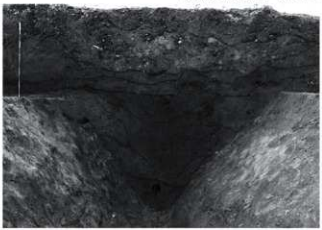
図版2

SD001（南東から）

SD001　V字溝近景（南西から）

SD001 土層断面（A-A'）

SD001・SI001（北から）



SD001 土層断面（B-B'）

SD001 遺物出土状況

SD001 作業風景

SI001（北から）

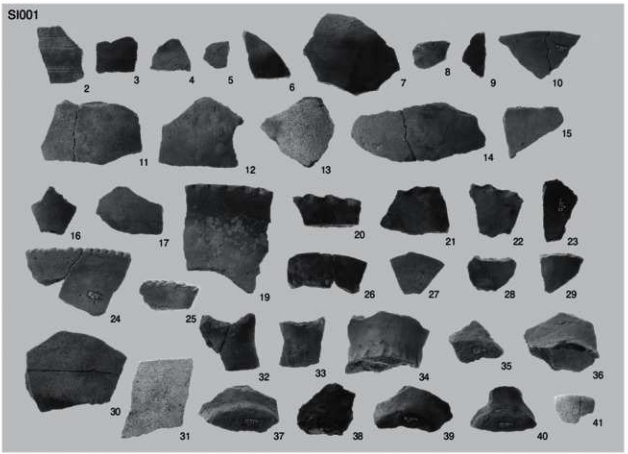
SI001 遺物出土状況

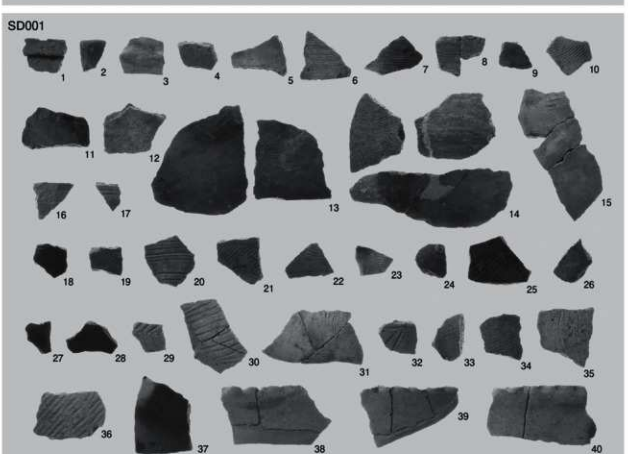
SK001（北東から）

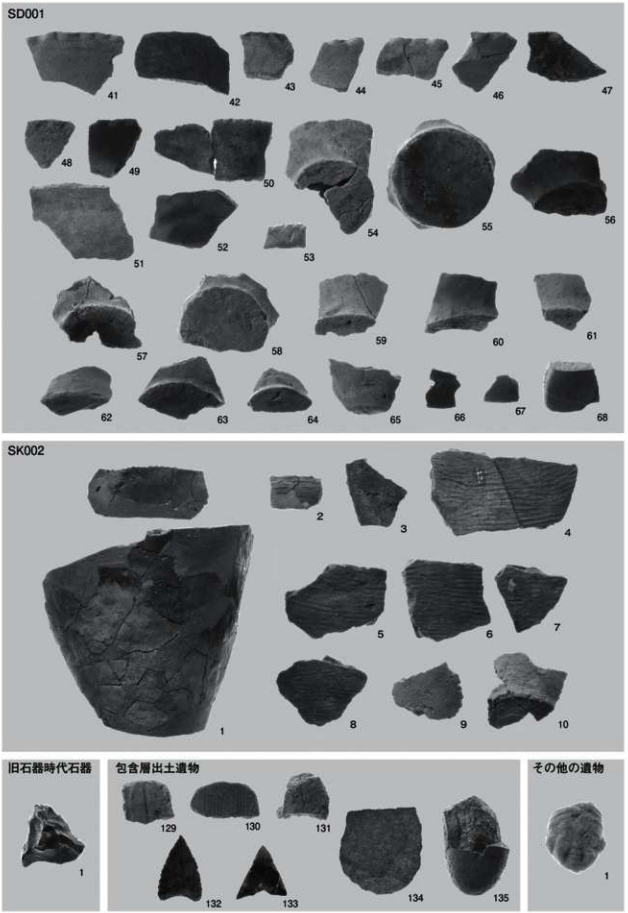
SK002・SK003（北西から）

SD002（北東から）

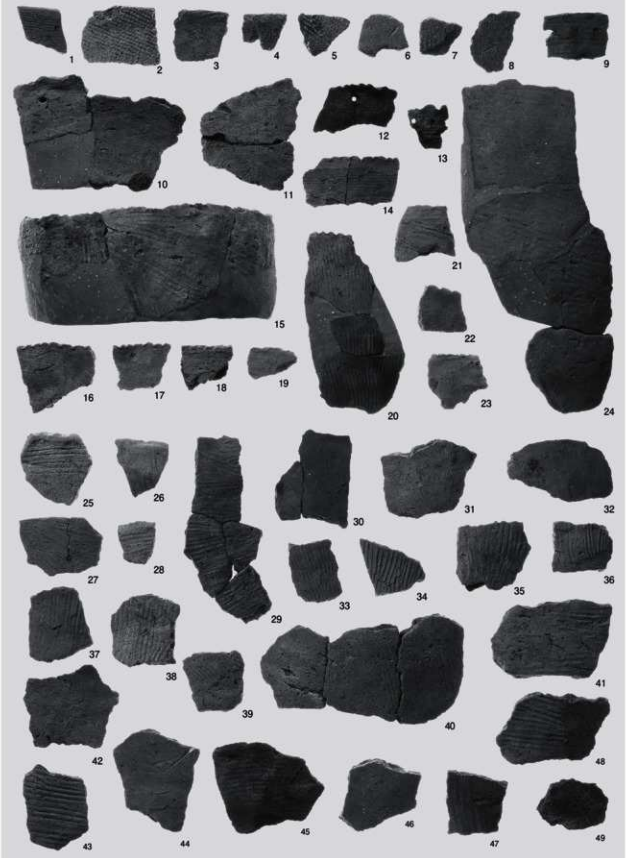
縄文時代遺物出土状況


SI001
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41

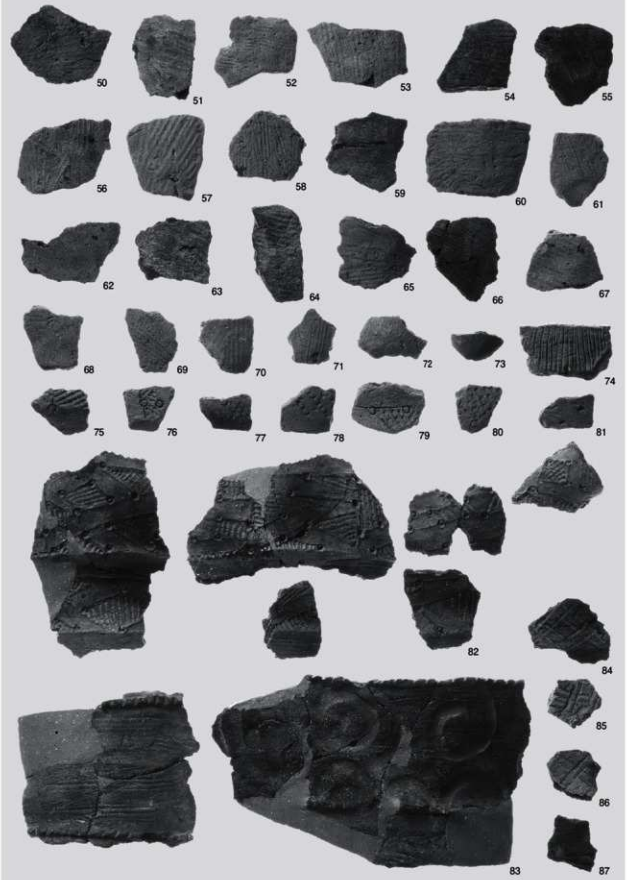

SD001
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40

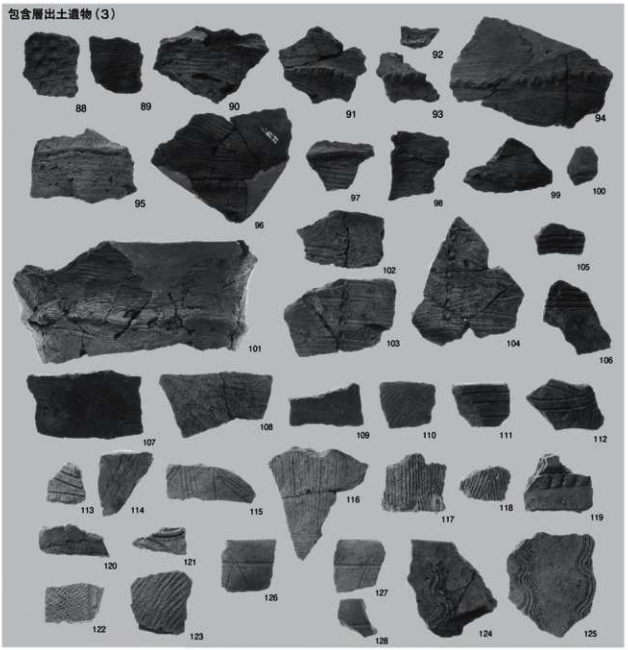

SD001
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
SK002
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
旧石器時代石器
1
包含層出土遺物
129
130
131
132
133
134
135
その他の遺物
1

包含層出土遺物（1）

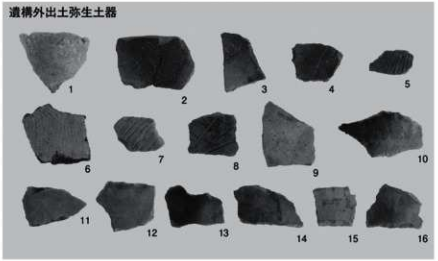

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49

包含層出土遺物（2）


50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87


包含層出土遺物（3）
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128

SI001
1


遺構外出土弥生土器
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16

# 報告書抄録

| | |
|---|---|
| ふりがな | やちよしかみこうやしらはたいせき（2）・（3） |
| 書名 | 八千代市上高野白幡遺跡（2）・（3） |
| 副書名 | 一般国道296号道路改良事業埋蔵文化財発掘調査報告書２ |
| 巻次 | 2 |
| シリーズ名 | 千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告 |
| シリーズ番号 | 第47集 |
| 編著者名 | 久我谷渓太・蜂屋孝之 |
| 編集機関 | 千葉県教育委員会 |
| 所在地 | 〒260-8662　千葉県千葉市中央区市場町1-1　TEL043-223-4129 |
| 発行年月日 | 西暦2024年２月20日 |

| 所収遺跡名（ふりがな） | 所在地（ふりがな） | コード 市町村 | コード 遺跡番号 | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 上高野白幡遺跡（かみこうやしらはたいせき） | 八千代市上高野（やちよしかみこうや）<br>676-6ほか | 12221 | 038 | 35度<br>44分<br>32秒 | 140度<br>08分<br>16秒 | 20201001～<br>20201106<br>20211201～<br>20220224 | 2,852㎡ | 道路建設 |
| | | | | 世界測地系 | | | | |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 上高野白幡遺跡 | 包蔵地<br>集落跡 | 旧石器 | | 石器 | 弥生時代中期の環濠を検出 |
| | | 縄文 | 炉跡３基、遺物包含層 | 縄文土器・石器 | |
| | | 弥生 | 竪穴住居跡１軒・環濠１条 | 弥生土器 | |

| | |
|---|---|
| 要約 | 弥生時代中期の環濠集落跡の一部が検出された。断面がV字状を呈する掘り込みの環濠は、平坦な台地上に展開するものと推測され、中期の典型的な環濠集落の一部を確認した。また、弥生土器では、千葉県内の類例が少ない北島式系土器が少量だが出土している。縄文時代早期の炉穴が検出されたほか、包含層からは、早期の撚糸文系土器、田戸上層式、鵜ガ島台式、茅山下層式土器などが出土している。 |

千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告第47集

八千代市上高野白幡遺跡（２）・（３）

－一般国道296号道路改良事業埋蔵文化財発掘調査報告書２－

令和６年２月20日発行

編集・発行　千葉県教育委員会
千葉市中央区市場町１－１

印刷　株式会社　正文社
千葉市中央区都町１－10－６